そのウマ娘、問題児につき。

shinp

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはトレセン学園に所属する、ある二人のウマ娘のストーリーである。

一人は多重人格のウマ娘で、もう一人は偏屈で意地悪なウマ娘。その二人が出会うことで物語が動き始めるのだった。

なるべく週１を目標に頑張ります。

目次

問題児、出会う。 1
問題児、誘いを受ける 7
問題児、皇帝と走る 11
問題児、意気込みを語る 17
問題児、問題に直面する 24
問題児、新たな日常に生きる 28
雑音、デビューをする 34
雑音、過去の因縁と再会する 40
二重人格者、レースをする。 47
雑音、母性を知る 55
問題児、正月を迎える 60
雑音、勝負服に袖を通す 64
雑音、皐月賞出走 69
雑音、庇われる 80
小物、玉砕する。 89
問題児、新たな仲間が加わる 94
日本ダービーに向けて 98
小物、覚醒する。 103
雑音、日本ダービー出走 112
雑音、焦燥する。 121

問題児、出会う。

トレセン学園。
それは、この世界に存在する耳と尾を持つウマ娘と呼ばれる少女たちが一握りの夢を掴むべく入学する学園だ。
志を共にする学友と友情を育み、時には研鑽しあい、高め合う。ここ、トレセン学園、正式名称『日本ウマ娘トレーニングセンター学園』は全国にあるトレセン学園の中でもトップクラスのウマ娘専用学園である。
「あはは～。それは面白い出来事ですね～。」
その学園の中庭。ベンチに腰掛けたウマ娘たちが談笑をしていた。
「そうなんだよねー。ゴルシ先輩がマックイーン先輩にたいやきを渡したと思ったら、たいやきを食べたマックイーン先輩がむせて、ゴルシ先輩がカラシがぁ！って悶え出したんだもん。」
「ゴルシ先輩って絡まれると疲れるよね。楽しそうだけど。」
そこには三人のウマ娘たちが奇人として有名なウマ娘ゴールドシップの事で盛り上がっていた。
「この前、なんか遠くで聞こえた救急車か消防車か、どっちのサイレンか忘れたけど、それに反応してヘドバンしてたみたい。」
「ホント、レースでも後ろ向きでゲートに入ろうとしたりと話題に事欠かないよね。」
「ね、カイシンもそう思わない？」
楽しそうにケラケラ笑う二人を笑顔でのんびりと眺めるカイシンと呼ばれたウマ娘に話題を振る。
「う～ん、ゴルシ先輩も何か考えがあっての事じゃないかな～？」
「いや、あれで何か考えがあるんじゃ怖いよ…。」
「それよりさ、この後何か予定ある？」
カイシンのコメントに困ったように微妙な顔をする二人。そんな空気を切り替えようと別の話題を切り出す。
「あ、こないだ近くに良いカフェ出来たみたいなんだ。」
「おぉー、いいじゃんいいじゃん、行こうよ。ねぇ、カイシン。」

「あ～…。ごめんなさ～い。わたし、この後選抜レースに出るんだ～。」
その中でカイシンが思い出したように、申し訳なさそうに予定を口にした。
このトレセン学園は入学出来たら即レースに出走。など出来るわけはない。
最初にトレセン学園に所属しているトレーナー達の前でレースを行い、見込みありと判断したトレーナーがそのウマ娘を勧誘する。いわゆるオーディションのようなものだ。そのレースに出るウマ娘たちは、優秀なトレーナーからスカウトを貰おうと躍起になる場でもあるのだ。
「だから～、これから走らなきゃいけないんだ～。誘ってくれたのにごめんね～。」
「あ、あー…。そう、なんだ。レース、頑張ってね…。」
「うん～。頑張ってくる～！」
微妙な顔で見送る友人にカイシンは張り切ると、喋り声とは裏腹に鋭い走りでレース場へと走っていった。
「カイシン…選抜出るんだ…。」
「何て言うか、一緒に走る事になっちゃった子、ご愁傷さまだよね…。」
残ったカイシンの友人であるウマ娘は、まるでこれから起こる悲劇を知っているかのように曇った表情をするのだった。

「ふむ、流石は選抜レース…。誰もが優秀なトレーナーに気に入られようとギラギラしていますね…。」
選抜レース、芝２４００ｍのゲート前、そこにはゼッケンを着けたウマ娘たちが屈伸や伸びをして身体をほぐして準備体操をしていた。その様子を少し離れた場所で両手を後ろで組んで見渡すように見ているウマ娘がいた。

ワインレッド一色の髪の毛に右目にモノクルアイを着け、邪悪な笑みを浮かべているウマ娘だ。勿論、彼女も選抜レースに出走するウマ娘である。ゼッケンに書かれた番号は6。名前はノイズサウンド。

「クフフフフ！……いいですね、いいですねぇ。昨日までは同じ釜の飯を食べ、共通の趣味や学園生活で笑い合ったクラスメイト、友人。そこにある友情は輝かしいものです。だが、今はどうでしょう？自分の周りは全て敵だと言わんばかりの張り詰めた空気！それまでの友情はごっこ遊びだったのかと錯覚してしまうほどのもの！アッハッハッハ!!」

ノイズサウンドは選抜レース出走前の空気を歪んだ視点で楽しみ、まるで劇の狂言回しのように饒舌に語り出す。ノイズサウンドが語った言葉に他のウマ娘たちは努めて無視をするか、図星を突かれないように平静を装うか、様々で更に空気が張り詰める。しかし、ノイズサウンドはそんな空気を楽しむように眺める。

「ふわ～！ごめんなさ～い！遅れました～！」

だが、そんな空気を打ち砕くような、のほほんとした、まるでメルヘンチックな雲の上か、お花畑に来たかのような声と口調をしたウマ娘が入ってきた。

「…む。」

空気が和らいだ事に眉間にシワを寄せるノイズサウンド。折角作った空気を壊された事に内心腹を立て、和らがせた声の主に視線を向けると、ゼッケンを着けたカイシンが入ってきた。ゼッケン番号は5である。

（…ふん。まぁ、いいでしょう。）

ゲートインの時間になった為、ノイズサウンドは渋々といった足取りでゲートに入り、カイシンもその隣のゲートに入った。

（…さて、今日も勝ちに行きますか。）

ノイズサウンドは気持ちを切り替え、準備体勢に入った。

ガコン！

ゲートが開いたと同時にウマ娘たちが走り出す。他のウマ娘たちがそれぞれのペースで走っていくが、ノイズサウンドは最後尾から走るウマ娘の様子を眺めるように走る。
（ふむふむ、やはり日本最高峰のトレセン学園。走り方、ペース配分、コース取り…。いつ見ても地方のトレセンとは雲泥の差ですね。このウマ娘たちはそれぞれの想いを胸に、このターフの上を走っていると思うと心踊りますが…。）
ノイズサウンドは自分の前を走っているウマ娘の後ろ姿を見ながらジワジワと先頭へスパートを掛けていく。まずはノイズサウンドが作った空気を壊してくれたカイシンを追い越す。ノイズサウンドが目線を一瞬カイシンに移すと、カイシンは焦った様子もなく走り続けていた。
（私の心を踊らせるには遠く及びませんよ。）
心の中でそう吐き捨てると、カイシンの前で集団になっているウマ娘たち。それを外側から差していくノイズサウンド。横目で他のウマ娘を見ると最後尾にいたはずのノイズサウンドに追い抜かれた事に気付き、焦り始めたウマ娘たちがペースを乱し始める。
（日本最高峰とはいえ、差されただけで焦るとは、その程度ですか。）
ノイズサウンドは肩透かしを食らった気分でスパートを掛け、集団を突き放した。既に第４コーナーに入り、最後の直線勝負になっていたが、集団は４、５バ身後ろ、ノイズサウンドが独走状態になっており、ノイズサウンド自身も勝ちを確信し、人相が悪い笑みを浮かべた。
しかし、レースに絶対はない。
ドッドッドッドッドッ…
独走状態のノイズサウンドの耳にウマ娘の足音が入ってきた。
「…む？」
ドッドッドッドッドッドッ
集団は引き離したはず。だが、その音は段々と、確実に近付いてくる。

ドッドッドッドッドッドッ！
（そんなまさか!?）
そして、その音はノイズサウンドの隣に追い付いた。ノイズサウンドは驚き、横目で見るとそこにいたのは、
「勝ちは俺様のもんだ譲りやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!!!!」
最初に追い越したカイシンだった。だが、その形相は追い越した時とは別人と思うほど凶悪で口が悪く、粗暴と言う言葉が似合いそうな走りだった。
ノイズサウンドは無言で加速し、カイシンを突き放そうと足に力を込め、駆け出す。
「うおりゃあああああああああ!!!!!!!!」
「…っ!!」
だが、カイシンも負けじと加速し始め、し烈なデッドヒートを展開し始めた。観客席では見に来ていたトレーナーやウマ娘たちの驚きと戸惑い、そして感嘆の声が聞こえた。
二人の差し差されの競り合いの末、二人はゴール板を通り抜けた。
「ふっ…ふっ…ふっ…ふっ…ふっ…！」
ノイズサウンドは荒くなった息を整えるように呼吸し始め、スコアボードを見る。その結果は、6が1位の枠に表示され、2位の5との差は「ハナ」と表示された。
「今回も、私が、一着、ですか…。」
ノイズサウンドは選抜レースで勝利を納めた。だが、ノイズサウンドはさっきのデッドヒートのようなギリギリの勝負で手の内を見せてしまった事で唇の下で歯噛みする。
（まさか、こんな早く全力を出すことになるとは…。前言撤回しましょう。この学園にいるウマ娘は底知れない者もいる。）
だが、それ以上に思わぬ強敵に出会えた感動の方が大きく笑みを浮かべた。ノイズサウンドはその感動を競り合ったウマ娘に送ろうと目を向けた。
「ほぇ～…。何ですごく疲れてるし、目の前がチカチカするぅ～。私勝ったのぉ～？」

が、件のウマ娘、カイシンは元のほんわかした雰囲気に戻っていた。
（ふむ…、このウマ娘は二重人格なのでしょうか？しかも、この様子は走っているときの記憶は無さそうですね。）
ノイズサウンドはカイシンについて分析し、後続のウマ娘たちに視線を向ける。
（そして、あの集団をすり抜けて来たと言うことは差しウマ娘としての素質もある…。）
ノイズサウンドが差し抜いたウマ娘の集団。ノイズサウンドが後ろや横目で見た限り、内から行くのは困難を極めるほどの密度、かと言って外から差しに行くのも大変な広がりだ。
（私も問題児であると言う自覚はあるつもりでしたが…。いやはや、楽しくなりそうだ…。）
ノイズサウンドは一人、クックックッと笑みを浮かべながらこれから大挙してくるであろうトレーナーのスカウトに囲まれるカイシンを見つめていた。

問題児、誘いを受ける

「君！中々の走りだったぞ！どうだ？うちに来ないか？」
「私なら貴女の能力を伸ばせると思うわ！どうかしら？」
「あんたの走りに見とれちまった！こっちに来てくれ！」
　出走を終えたノイズサウンドとカイシンは制服に着替えてレース場を出た後、案の定カイシンはトレーナー達の勧誘を受けていた。
「おやおや、大人気ですね。」
「ふわぁ～!?そんなにたくさん話さないでよぉ～！」
　カイシンは頭の処理が追い付かないのか煙が出そうな顔になり、ノイズサウンドは涼しい顔で困ったように笑う。
「た、助けて下さいよぉ～！」
「まぁ、良い機会です。頑張ってください。」
　ノイズサウンドは自分をそっちのけでトレーナーに囲まれるカイシンを見捨ててそそくさと退散していった。
　こうして二人は別れた。次に会うのはどこかのレース場だろう。ノイズサウンドはそう考えた。

　数日後、

「うぇ～ん！助けてくださいぃ～。ノイズサウンドさぁ～ん！」
「どうして私にすがるのですか？と言うか、何があったのですか？て言うか、離してください。」
　そこには泣きじゃくりながらノイズサウンドの制服のスカートを掴むカイシンの姿があった。しかも、エントランスという大勢の人の目につきやすい場所なのだ。何があったんだと言いたげな目をしているウマ娘や職員、トレーナーたちの視線が二人に集中する。
「ぐすっ、えぐっ。」
「ほら、周りの視線が痛いから別の場所で話を聞いてあげますよ？立ってください。」
「うん…。ずずっ、ありがとうございますぅ～。」

「スカートで鼻をかんだら蹴り飛ばしますからね？」
「は、はいっ！」
　二人はエントランスから場所を移して、人通りが少ない場で事情を聞いてみると、案の定の理由だった。
「なるほど。併走トレーニングをしたら、他の子を怯えさせたので、もう来なくていいと言われたのですね？」
「そうなんですよぉ～！わたしは普通に走っていただけなのにぃ～！うぇ～～～ん！」
「貴女には御学友のウマ娘がいらっしゃった筈ですが、彼女らに相談は？」
「それがぁ、二人とも『知ってた。』って感じで取り合ってくれないんですぅ～！ひどい仕打ちですよぉ～！」
（でしょうね。）
　カイシンはまた泣き崩れてしまい、ノイズサウンドもカイシンの友人と全く同じ感想を胸の内に抱く。付き合ってられないと思い、適当な事を言って逃げようとしたが、
「そうだ！ノイズサウンドさん、まだ担当トレーナー決まってないんですよね？それじゃあ、わたし達二人でチーム作ってトゥインクルシリーズに出ましょう！そうすれば…」
「トレーナーが居なければ出走は出来ませんよ？と言うか巻き込むの止めてください。」
「あぅっ！正論ですし、辛辣…！い、良いじゃないですかぁ！選抜レースで一緒にゴールした仲ですよぉ!?」
「何時からそんな関係になったのですか？それにレースの結果に関しては、私がハナ差で貴女より先にゴールしています。」
「そんなの屁理屈ですぅ～！」
　ああ言えばこう言う。そんな押し問答が繰り広げられそうになった瞬間、
「歓談中にすまない。少しいいかな？」
　凛とした、それでいて威厳のある声が二人の会話に割り込んできた。

「こ、この声ってぇ……！」
「…おやおや。」
押し問答を止め、声がした方に目を向けると、カイシンは顔面蒼白になり、ノイズサウンドは不敵な笑みを浮かべた。
そこにいたのは、このトレセン学園の生徒会長、シンボリルドルフだった。無敗でG1レースを七勝し、『レースに絶対はないが、このウマ娘には絶対がある』と言わしめたウマ娘が二人の前に現れたのだ。
「る、るるる、ルドルフ会長!?」
「これはこれは。皇帝様が私たちに何か御用で？」
「楽にしてくれて構わない。君達二人に用があって来たんだ。」
「ほう、ほうほうほう！かの生徒会長様から話があるとは！皇帝様は随分暇で物好きのようですね！」
「ノ、ノイズサウンドさん！失礼ですよぉ！」
ルドルフから話し掛けられたカイシンはまた何かやらかしてしまったのかと震えだし、ノイズサウンドは更に口を弧を描くほど口角を上げ、笑みを浮かべる。
「カイシン君。先程、君の元トレーナーに伝言を受けたのだが…」
「あああああああ!!!やっぱりそうですよね!!退学!?退学になるんですか!?うわぁぁぁぁぁぁぁん!!痛っ!?」
ルドルフが次の言葉を紡ぐ前にカイシンは元トレーナーの言葉で早合点し、取り乱し始めた。ノイズサウンドは話が進まなくなると察知し、直ぐ様カイシンの頭を鷲掴みにして握力で黙らせた。
「カイシンさん？生徒会長はまだ何も言ってないですよ？」
「い、痛い痛いぃぃ～！」
その様子をルドルフは困ったように笑って見ている。端から見れば状況が掴めない場になっているが、ここは比較的人通りが少ない場所だ。仮に誰かに見られたとして、その場の状況を話したとしても、信じて貰えないだろう。
「落ち着きましたか？」
「はい…。」
「ふふ、手間を掛けさせてすまなかった。さて、話を戻すが、君の元ト

レーナーから『併走トレーニング中に発覚した問題はあるが、素質はある。磨けば光ると思うが自分の手には負えない問題だ。切り捨てるような形になってしまって申し訳なかった。』との伝言を受けたのだ。」

ルドルフからの報告を受けたカイシンはまたも目から涙を流し始めた。切り捨てたかと思っていた相手が気に掛けてくれていた事に感動したのだ。

「そして、ノイズサウンド君。君はこれまで何度も選抜レースを出ているが、何時になったら担当トレーナーが決まるのだ？」

「え。ノイズサウンドさん、そんなに出てて、まだ担当居ないんですか？あれ程わたしに高説垂れてたのに？」

真剣な眼差しで見つめるルドルフと急に冷めた目線になったカイシン、普通なら居心地が悪くなるような状況だが、ノイズサウンドは何処吹く風の態度だった。

「ふむ、そう言われると痛いですね。ですが、残念ながら私は、私が決めたやり方を貫き通したいのですよ。そのやり方を汲んでくれるトレーナーがいれば行くのですが、生憎トレーナーの皆様方はデータばかりででしてね。お似合いの相手が中々見つからない訳でして。」

ノイズサウンドは仰々しく肩を竦め、成果なしのアピールをする。どれだけ言われようが後ろ指を指されようが全く意に介さないようだ。その言葉を聞いた相手次第では高望みするなと反感を買う内容だが、ノイズサウンドなりに考えがあるのだろう。

「成る程、君の言い分は良く分かったよ。それで君達二人に提案があるのだが…。」

ノイズサウンドの言い分を聞いたルドルフは頷くと、その次に言葉を紡いだ。

「二人とも、私と模擬レースをしてみないか？」

「「……はい？」」

その言葉に二人は思わず聞き返したのだった。

問題児、皇帝と走る

皇帝シンボリルドルフが模擬レースをする。その情報は瞬く間に広まり、レース場はルドルフの走りを見ようと大勢のトレーナーとウマ娘たちで賑わっていた。

「やれやれ、まさかこんな事になるとは。人生何が起こるか分かったもんじゃないですね。」

「どどどどど、どうしてそんな涼しい顔でいられるんですかぁぁぁ…。さっきこっそりレース場覗いたら物凄い人だかりが出来てたんですよぉぉぉ…。観客はみんな人参…人参…。」

控え室でゼッケンを着けたノイズサウンドは悠々としているが、それに対しカイシンは緊張で身震いが止まらない状態だった。そんなカイシンを見てノイズサウンドは玩具を見つけた子供のように口角を上げた。

「観客は皆人参ですか…。歓声を上げる人参が大量に転がっているレース場で走るのはどんな気分ですか？」

「うわぁぁぁぁ!!落ち着こうとしていたのに止めてくださいよぉぉぉぉぉっ！」

思った通りの反応をするカイシンにノイズサウンドはケラケラと笑う。

「レース場を走るウマ娘の理想として、ここは慣れる場だと思っておいた方が気が楽ですよ？《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》有馬記念《／ｆｏｎｔ》や天皇賞等のＧ１レースだと、これの倍以上は余裕でいると思いますので。」

「あぁ…三女神様はどうして、わたしをこんな運命に…？」

「さぁ、行きましょう。生徒会長を待たせるわけにはいきませんからね。」

ノイズサウンドは途方に暮れるカイシンの襟を掴んで、一緒に控え室からレース場へと向かった。

レース場に出るとそこにはシンボリルドルフが腕を組んで二人を

待っていた。その佇まいから、そして観客席から聞こえる賑わいから醸し出す、上に立つ者としての威厳にノイズサウンドは表情こそは変わらないものの冷や汗を流し、カイシンは圧倒されていた。
（観客、雰囲気、歓声…これがシンボリルドルフの影響力…。レース映像を見ていたからどうにかなると思っていましたが…やはり生だと実感しますね。圧倒的な強者だと。）
（ひ、ひぇぇ…。会長怖いぃ…。）
「よく来てくれた。私の我儘を聞き入れてくれて感謝する。」
ゲート前でシンボリルドルフは二人に笑い掛ける。
「いえいえ！かの皇帝の異名で知られる貴女の誘いを断るなど、それこそ無礼千万ですよ。」
「あ、あああああ、あの！よろしくお願いします!!」
シンボリルドルフの言葉に二人は返事をする。
「模擬とは言え、手加減しませんよ？もしかすると、私が勝ってしまったりして。」
「フッ、そうでなくては面白くない！では、始めようか。君達の矜持をこの私に走りで示してくれ！」
ノイズサウンドは不敵な笑みを浮かべた顔で、カイシンはこの世の終わりのような顔で、シンボリルドルフは真剣な顔で、ゲート入りをした。
一瞬訪れる静寂。
その静寂はゲートが開く音を合図に歓声に変わった。
最初はカイシンが先頭、その後ろにシンボリルドルフ。そして最後尾にノイズサウンドの順となった。
（無理無理無理ルドルフ会長に勝てるわけないってもうずっと後ろで足音が聞こえてるし離れないもんでもここで全力出さなきゃ失礼だしでも会長に叶う相手なんているの居ないよねだからもう何位でもいいからとにかく走り抜かなきゃ走って走って走ってビリでもいいから走らなきゃああでも勝ちたいなぁどうしようどうすれば勝てるのこれ無理だよね無理じゃんでも勝ちたいえこれどうればいいの勝っちゃったらわたしが皇帝になっちゃうってことむりむりむり）

カイシンは頭の中が混乱しながらも走り続け、先頭をキープする。
（今のところ、カイシン君は掛かり気味だが、問題があるようには見えないな…。だが、それよりも問題なのは、私の後ろにいるノイズサウンド君だ。彼女は何故、追込の走りをしているのだ？過去に何かあったのか？）
シンボリルドルフは自分の前と後ろを走るウマ娘の分析をする。だが、今はレース中。疑問は捨てて、走りに専念する事にした。
（流石は皇帝シンボリルドルフ…。選抜レースのウマ娘達とは一線を越えた…いや、最早次元が違う走りですね。彼女に憧れて走るウマ娘もいるわけだ…。あぁ、そうですよ！この素晴らしい走りをするウマ娘を追い越して勝つ！何とも素晴らしい下剋上ではないか！）
ノイズサウンドは自分の前を走るシンボリルドルフの背中に闘争心を燃やし、スパートへの活力にする。
そして最終コーナー。最初に抜け出したのはノイズサウンドだった。
「では、お先に！」
ノイズサウンドは溜めていた脚力を開放すると一気にシンボリルドルフとカイシンを追い抜いて行った。
「そう易々と譲るか！」
だが、シンボリルドルフは逃がさない。直ぐ様ノイズサウンドの横に付いて、競り合う。
（っ。やはりそう簡単に行かせてはくれませんか！それでこそ心が踊る！）
ノイズサウンドも負けじと加速し、熾烈なデッドヒートを展開し始めた。
そして、最後尾になってしまったカイシンは、
（あああああああああやっぱり無理ですよね知ってた知ってましたやっぱりこんな事になるよねそうですよねああでも悔しいなぁ勝ちたい勝ちたい勝ちたい勝ちたい勝ちたい勝ちたい勝ちたい勝ちたい）
段々と走り方が変わっていき、グングンと前を走る二人へと近付い

て来た。
「なぁにが皇帝だ！一着は俺様のもんだ道開けろやこらぁあああああ!!!」
豹変したカイシンにノイズサウンドは始まったと言わんばかりの表情をし、シンボリルドルフは驚きながらも、直ぐに冷静になり引き離しに掛かる。
最後の直線は三人によるデッドヒートを展開した。そして、

「負けちゃいましたねぇ…。」
「……。」
シンボリルドルフの圧倒的な加速に追い付けず、敗北を喫した。ノイズサウンドは追い越せただけマシかと開き直ったが、豹変したカイシンはそれでも追い抜こうと無茶なペースで走ってしまい、残り１００ｍでバテて失速、ビリになった。
そして、今現在ノイズサウンドとカイシンは控え室でそれぞれ椅子に腰掛けて黄昏ていた。ノイズサウンドは天井を眺めながらシンボリルドルフとのレースを噛み締め、カイシンはスタミナが切れ、ただただぐったりしていた。
（あれが皇帝の走り…。直接対決して分かったのは、あの走りをイメージトレーニングの相手にすればトゥインクルシリーズはそれなりに行けるかもしれないと言う事だけ…。厄介な相手ですねぇ。）
ノイズサウンドはしみじみとシンボリルドルフの走りを思い返し、噛み締める。あのルドルフに勝つのは容易ではない。だからこそ燃える。だからレースは止められない。凶悪な笑みを浮かべ、いつか絶

対の走りを持つ皇帝を討つべく、ここ最近萎えかけていた闘争心を燃やしていた。
（……後半全く覚えてないけどぉ、わたしの前を走る会長とノイズサウンドさんの走り、スゴかったなぁ…。わたしもあんな風に、なれるかなぁ…。あぁ～！何で最後らへん覚えてないのぉ～!?）
　カイシンは考える余裕が出来るほど回復し、レース中に残っていた自分の前を走り、引き離す二人を思い出す。が、そこから記憶に靄が掛かったようになってしまう。いつも第４コーナーを越えた辺りから曖昧になる自分の記憶力が嫌になる。だから、最初から最後まで覚えていられるようになろう。そう決意する。
「失礼する。」
　すると、控え室のドアが開き、サングラスを掛けた細身の中年男性が入ってきた。二人は、突然の訪問者に目を向ける。
「お前らがさっきシンボリルドルフと競っていた二人だな？単刀直入に言う。お前ら、俺の元で走れ。」
「え…。」
「ほう。」
　入ってきた男性はキッパリと勧誘してきた。二人は続く突然の出来事に思わず声を出した。
「と、トレーナーさん…？」
「…クックック！私たち二人を勧誘するとは、余程の物好きですね。」
「お前ら二人の走りを見て決めた。だから来い。」
　言葉数は少ないが、サングラス越しに見える眼差しは真剣だ。丁度レースに対する情熱を燃やし始めた二人にとっては渡りに船の状況だった。
「良いでしょう！こんな変人ウマ娘である私たちを受け入れて、どれだけ胃に穴を空かずにいられるか興味があります！受け入れましょう！」
「うんうん…うん？ちょっと待って下さい。変人ウマ娘たちって、わたしも入ってるんですかぁ？」
「おや、入らないのですか？」

「いや、入りますよぉ！でもノイズサウンドさんに変人扱いされたくないですよぉ～！」

こうして、担当トレーナーが決まった二人のウマ娘の戦いが始まったのだった。

問題児、意気込みを語る

『ねぇ、わたしたち、これからも一緒でしょ？一緒に有馬記念を走ろうね！』
『と、トレセン学園って、一人しか行けないの…!?』
『今度のレース、アンタは後ろで走っててよ。アタシの頼み聞けるでしょ？友達なんでしょ？』
『何で…何で脚質合ってない筈なのに一着になれるの!?意味分かんない！』
『絶対に…絶対に許さない！アタシを差し置いてアンタ一人だけトレセン学園に行って！許さない！絶対に許さない！』
『この悪魔！アンタなんか屈腱炎になって走れなくなってしまえ！』

「……久しぶりに見ましたね、この内容の夢。」
ノイズサウンドはゆっくりと体を起こしながら呟く。
「…まだ引きずってるようでは甘いですね、私も。」
夢の内容は脳の記憶の整理の為に行われていると言われているらしい。
昔の出来事を忘れられない自分は何なのだろう。いや、むしろ今の自分が出来た出来事だから忘れないのだろう。
ノイズサウンドは自分一人しか居ない部屋のベッドの上で自嘲気味に、クックックと嗤ったのだった。

カイシンは同室のウマ娘と共に身支度中だった。同室のウマ娘はそれとなしにカイシンに話し掛ける。
「ビックリだよね。昨日トレーナーから解雇されたと思ったら、あのルドルフ会長と走って、もう新しいトレーナーが着いてるんだもん。」
「あはは～。わたしもビックリしたよぉ～。」
「にしても、あのノイズサウンド先輩と一緒のチームって…運が悪いと言うか、何と言うか。」
何やら良い印象を抱いてないように含みを入れる同居人。それに

カイシンは首をかしげた。
「？ノイズサウンド先輩って、有名人なんですかぁ～？」
「有名も何も、このトレセン学園の問題児に名を連ねている先輩だよ!?あの意地の悪い感情が読めない笑顔で喋る人なんだよ!?同室とか無理だって！」
　どうやら、ノイズサウンドはカイシンがいる寮と同じ寮なのだが、あまりにも不気味すぎて同居したくない、朝イチに話し掛けられたくないと言う意見が集中したらしい。寮長のフジキセキが注意したらしいが、
「ほう、ほうほう！寮長様は私に肺呼吸をするなと仰られるのですか！生憎、この顔は生まれつきのもの。それを止めろと言うのは酷なものかと思いますがねぇ？」
　と、反論した結果、寮の一番端っこの部屋に一人だけ移されているらしい。
「へぇ～。」
「だから、あんまり関わらない方が良いよ。何されるか分かったもんじゃないし。」
　そうアドバイスされた直後、出入口のドアを誰かがノックしている音が聞こえた。
「あ～。わたし今髪飾り付けてるから出て～！」
「はいはい。」
　鏡と向かい合って髪飾りを付けてるカイシンに代わり、同室のウマ娘がドアを開けると、
「やぁ、お」
　さっき話題に出したウマ娘がいた。思わずドアを閉めてしまい、気のせいかと思い、もう一度開けると、
「はよう！」
　やっぱり問題児だった。同室のウマ娘はドアを閉め、カイシンに呼び掛ける。
「ね、ねぇ、カイシン？」
「ん～？」

「ノイズサウンド先輩が、ドアの前にいるんだけど…。」
「あ、分かった～！」

「いやはや、こうやって訪ねに行くのは初めてだったのですが、いきなりドアを閉められるとは思っても見ませんでしたよ。」
「あはは～。怖がられちゃってるねぇ～。」
その後、一緒に寮から出て登校するノイズサウンドとカイシン。ノイズサウンドは迎えに来て挨拶したら閉められた事にわざとらしく悲しそうな顔をするが、カイシンはのほほんと笑う。周りではノイズサウンドが誰かと一緒に歩いていることに不思議に思ったウマ娘たちの視線が集中しているが、二人は気にすることなく校舎へと入っていった。
「おや、貴女は中等部だったんですか。」
「そうなんですよ～。じゃあ、午後のトレーニング頑張りましょ～！」

そして午後、担当のトレーナーが着いた二人は、先にレース場でトレーナーが来るまでの間、軽く準備運動をしていた。特にカイシンは鼻唄を歌いながら体をほぐしていることから上機嫌なのが見てとれた。
「ご機嫌ですね。」
「えへへ～。そりゃあ、そうですよ～。こうしてわたしたちにトレーナーが着いたんですからご機嫌になりますよぉ～。」
「…にしても、その喋り方が貴女の素なのですね。」
「ふぇ？何の事ですか～？」
「おっと、トレーナーさんが来ましたよ。」
ノイズサウンドが言った通り、勧誘したトレーナーが現れた。ズボンのポケットに手を突っ込みながらこちらに歩いてくるサングラスを掛けた男。これに煙草を咥えていたら裏関係の人間だと思われかねない容姿のトレーナーにカイシンは慌てて背筋を伸ばし、ピシッと音が出そうな程の気を付け姿勢になった。

「と、トレーナーさん！きょ、今日から、よ、よろしゅく、よろしくお願いします！」
「昨日言ったが、今日からお前らのトレーナーになった恐山蓮（おそれやまれん）だ。よろしく。」
　カイシンは緊張のあまり舌が回らず噛んでしまったが、新任トレーナーの恐山は気にすることなく話を続けた。
「まずはお互いの事を知るために質問タイムにする。何か…ノイズサウンド、何だ？」
　恐山が言い終わる前にノイズサウンドが挙手をし、恐山はノイズサウンドに言うよう促す。
「私たちを誘ったのならば、何故選抜レースの時に誘わなかったのですか？」
「まず、カイシン。お前は選抜の時に目を付けていたが、お先に取られてしまったからだ。まぁ、チームから外されたって聞いたときは棚からぼた餅が落ちた気分だったな。」
「あー、そうですか…。」
　最初に自分を誘った理由を聞いたカイシンは怒って良いのか、喜んで良いのか分からない複雑な表情になる。
「そしてノイズサウンド。お前は選抜レースで全く本気を出さない走りをしていたから、敢えて誘わなかった。だが、シンボリルドルフとの模擬レース。あの皇帝と本気であそこまで張り合う実力、磨けば光ると思ってな。」
「…ほうほう。つまり貴方は私に皇帝を越えろと。そう言いたいのですね？」
　そしてノイズサウンドは面白そうに邪悪な笑みを浮かべ、わざとスケールを大きくして意地の悪い返しをする。
「あぁ。最終的にはそこまで行く予定だ。その間にお前たちをクラシック三冠取れる程の実力を付けてやる。」
　だが、恐山トレーナーは臆することなくハッキリと返した。恐山トレーナーの言葉にカイシンは息を飲む。
「さ、三冠…。」

「今年のクラシックは普通なら三冠を取れるような連中が転がっているんだぞ。それでもやれるか？」
　恐山トレーナーの問い掛けにカイシンは尻込みする。クラシック三冠とは皐月賞、日本ダービー、菊花賞の事でそれぞれ速いウマ娘、運が良いウマ娘、強いウマ娘が勝つと言われている。それを三連覇すると言う事は速く、運が良く、強い。その三つを兼ね備えていると言うことになる。そんな過酷な目標にログマイヤは息を飲むが、ノイズサウンドの含み笑いが聞こえてきた。
「クックックッ…フッフッフッフッ……！アーッハッハッハッハッ!!」
「ノ、ノイズサウンドさん？」
　見事な三段笑いにカイシンはポカンとする。
「あー…、こんなに笑ったのはいつ以来でしょうか。クラシック三冠！そこまで言いますか！ますます気に入りましたよ！ならば、貴方の為に見事三冠を取って見せましょうか！」
「わ、私も！長距離は難しいかもだけど、頑張ります！」
　ノイズサウンドはひとしきり笑ったあと、恐山トレーナーと握手を交わそうと手を差し出す。カイシンも同調して意気込みを語ろうとした。
「ちょぉーっと、待ったぁーっ！」
　すると、第三者の声が割り込み、三冠に意気込むノイズサウンドたちに待ったをかけた。
「とぅっ！」
　声がしたほうへ目を向けると、トレーニング中だったのか、ジャージを着た一人のウマ娘が軽々とコースの柵を飛び越えて、華麗に着地した。
「何だか聞き捨てならない言葉が聞こえたぞー！」
　現れたウマ娘は長めのポニーテールでシンボリルドルフのように白い一房の前髪が特徴のウマ娘だった。
「へ？あ、あなたは…。」
「カイシンさん。一緒に走ることになるかも知れない相手の事はしておいた方がいいですよ？彼女はトウカイテイオー。あのルドルフ会

長に憧れて走っている、まさに主人公のような志を持つウマ娘です。」
　唐突に現れたウマ娘、トウカイテイオーにカイシンはまたも戸惑うが、ノイズサウンドは面白そうに口を歪めた。
「お？ノッポの君ぃ、ボクの事を知ってるみたいだねぇ。」
「いえいえ、あれだけ胸を張って目標を宣言すれば記憶に残りますよ。クラシック三冠。あのシンボリルドルフも達成した業績を後を追うように進むウマ娘は後を絶ちませんからねぇ。」
「それよりも、キミも目指しているんだね。クラシック三冠。言っておくけど、三冠達成はボクのものになるんだ。キミには負けないよ！」
　トウカイテイオーの意思の強い目と言葉に、ノイズサウンドは目を見開き、これまで感じたことない、不思議な感情が沸き上がってきた。
（…何でしょう、これは。私に向けるトウカイテイオーの目と言葉に、震えているのか？…これは恐怖じゃない。これは、むしろ…。）
「クックックッ…。負けない、ですか。面白い！そこまで言うのならば、私も貴女に全力を出さねば無礼と言うものです！いいでしょう。その挑戦、受け入れます。貴女がその夢に邁進するならば、私も受けて立ちますよ！トウカイテイオーさん！この私、ノイズサウンドは貴女の三冠達成の夢を阻んで見せましょう！」
「にししっ！望むところだよ！ノイズサウンド！名前は覚えたからね！」
「あ、あの、ノイズサウンドさんが悪役みたいに…トレーナーさん！止めないんですかぁ!?」
「別に良いだろ。最終的に勝てば官軍だ。」
「面白がってますよねぇ!?トレーナーさぁん！」
　滾る感情をそのままにノイズサウンドはトウカイテイオーに宣戦布告をし、トウカイテイオーも受け入れた。そして、これからのトレーニング内容を考える事で恐山トレーナーは僅かに口角を上げたのだった。
「ふふっ、そうか…。面白くなってきたな。」

その様子をレース場を一望できる場所から見下ろす一人のウマ娘がいた。シンボリルドルフだ。
問題児二人の実力を模擬レースで実感したルドルフはそのままにしておくのが惜しいと思うほどの才能だと思っていた。そんな二人にトレーナーが着いた。その情報が耳に入ったルドルフは安堵していたのだ。
「あの二人もトレーナーが着いてくれて、テイオーも同じ三冠を狙う良いライバルが出来たな…。」
自分に憧れてやって来た、天才的才能を持つトウカイテイオーと、これまで選抜レースで燻っていた、問題児の激突。このトウインクルシリーズは大いに盛り上がるだろう。
まだ見ぬ未来に夢を見て、シンボリルドルフはその場を後にした。

問題児、問題に直面する

トウカイテイオーに宣戦布告をした後、早速トレーニングを始め、まずは併走トレーニングで脚力とスピードを鍛えるところから始めたのだが…。

「誰の許しで俺の前走ってんだてめぇ!?あぁ!?てめぇだよてめぇ!!その気色悪ぃ薄ら笑い顔ひっぺがしてやろうか!?おい待てやコラァ!!逃げんじゃねぇよ止まれやてめぇ!!」

「はぁ…、喧しいですよ貴女。」

「あぁ!?今何つった!?もっぺん言ってみろよこの××が!!!」

×

×

早速、問題に直面した。

「ぜぇ、ぜぇ、ぜぇ…。」

「やれやれ。これは前途多難ですよ、トレーナーさん。」

「…まさか併走トレーニングだけでああまで豹変するとはな。こりゃチームから外されるわけだ。あんな感じで付き合わされたウマ娘の身が持たんし、メンタルにも影響する。」

案の定、カイシンは途中から豹変して怒鳴り散らしながらノイズサウンドを追い越そうとし始めた。

だが、ノイズサウンドは一緒に走るのは二度目のため、どう来るのか、どういうペースで走るのか予想していたので余裕綽々で走っていた。

その一方、カイシンはシンボリルドルフとの模擬レース同様、中盤から無茶なペース配分、怒鳴り散らし余計な体力の消耗、そしてその二つを掛け合わせて大幅にスタミナを消費したことによる失速。

コースを一周するまでにペースを保てないようでは今後のレースの障害になってしまうことは明白だった。しかもタチが悪いことに、走り終えると問題の人格は引っ込んでしまうのだ。

「カイシン、聞こえるか?返事できるか?」

「は、はひぃ…何とかぁ…。」

恐山トレーナーが意識の確認を取ると、カイシンは汗だくで息絶え

絶えながら、返事をした。その様子を見た恐山トレーナーは口を開く。
「そうか、なら答えろ。お前は一人で走っているときはどれくらいの距離を走れる？」
「マ、マイルから、中距離、です…。」
「記憶はあるんだな？」
「一人で、走っているときは、ちゃんと、最後まで、覚えてますぅ…。でも、誰かと一緒に走ると、いっつも、後半の、記憶が無くてぇ…。」
カイシンの言葉に恐山トレーナーは思案するように腕を組んだ。カイシンは普通のウマ娘とは違う。だから普通のトレーニングでは才能を伸ばすことはできない。
前半の走りはフォームやペース配分はそれなりにいい線を行っているのだが、後半の諸々が完全にダメにしてしまっている。
一人では勝負にならないし、かといって二人以上になると、まるでスプリンターのようなペースで走ってしまい、それに加え妨害行為を行ってしまう悪癖。
こんな状態で本番に出してしまえば、良くて降着。最悪の場合、出走停止になりかねない爆弾を抱えていた。
「…ふむ。なら、今日のカイシンの練習はこれぐらいにしておくか。おい、カイシン。お前はこれから柔軟体操をして筋肉をほぐせ。」
「は、はい。ありがとうございますぅ…。」
恐山トレーナーはカイシンのトレーニングメニューをもう一度よく考える事にし、コースの端で柔軟するよう指示して、カイシンも従ってヘトヘトになりながらも移動していった。
「では、私はこれからどうトレーニングするのですか？恐山トレーナー？」
「ああ、そうだな。さっきのお前の走りを見て意見を言おうと思うが、構わないな？」
疲労困憊のカイシンを見送った後、まだ余裕があるノイズサウンドがトレーナーに指示を仰いで来た。恐山トレーナーはノイズサウンドと意見交換をしようとノイズサウンドの目を見て、サングラス越し

の目を細めた。
　此方を見るノイズサウンドの目は、まるでトレーナーを試すかのように挑戦的な眼差しだ。日が暮れ掛けていることも相まって、その顔は不気味にも見える。
　下手なことを言えば、失望されかねない。そんな感じの視線だ。だが、これから二人三脚で走る相棒でもあるのだ。恐山トレーナーは、自分なりに真摯に向き合おうとした。
「ええ、どうぞ。忖度の無い真っ直ぐな意見をよろしくお願いします。」
「お前はこれまで追込の走りをしているが、それは何故だ？」
「…おや。もしかして貴方も他の方と同じような疑問を？ならば、答えましょう。今の私にとってはこの走りが一番気持ち良く走れるからです。」
「…そうか。まぁ、実際のお前は選抜レースを余裕で一着になり、あの模擬レースでもシンボリルドルフと接戦になる程の実力がある。…でもそれはお前の本気じゃないだろう？」
　恐山トレーナーはノイズサウンドの不気味な笑顔に臆することなく睨み返す。
「…と、言いますと？」
「お前の走りは他のウマ娘の走り方を観察しているようだった。最初は走るコースを予測しているのかと思っていたのだが、選抜レースと模擬レース。この二つでのペース配分とスパートを掛けるタイミングが違った。」
　恐山トレーナーの分析をノイズサウンドは黙して、笑顔のまま聞き続ける。
「それで俺が考えたのは、お前は自分が戦うに相応しい相手だと認識すればそれだけ本気で走れるのではないか？とな。」
「…よく見ておられるんですね。ええ、正解ですよ。私は自分が戦って満足できる相手だと思ったなら本気を出す性分です。」
「トウカイテイオーとのやり取りも、そうなのか？」
「そうですねぇ。あのトウカイテイオーの私に臆さない、あの真っ直

ぐな目、夢に向かって邁進する自信と希望に満ち溢れたあの顔を曇らせると、どうなるか。考えただけで滾りますよねぇ？」
ノイズサウンドは宣戦布告してきたトウカイテイオーの顔を思い出し、更に邪悪に満ちた表情になる。
夢を持ってやって来たウマ娘を絶望させて、その様を見て嗤う。
興奮気味にそう語るノイズサウンドはこの学園に来るウマ娘にあるまじき思想を持っていた。
「…そうか。お前のその話を聞いて、前任はどう答えたんだ？」
「前任？あぁ、その方、というかほぼ全員、激昂して私を非難しました。そのような目的で走るな。とね。」
「…なるほど。」
「全く、器は広くなくちゃいけませんよ。このトゥインクルシリーズには悪役と呼ばれるようなウマ娘は居りませんが、皆が仲良しこよしで走っているわけではないでしょう？ここは勝負の世界。同じ釜、同じ志を持って走る仲間。そして、その後に残るのは勝利の栄誉を手にし、讃えられる者と、夢破れて慟哭し、怨嗟を吐く者。その二つに分かれるのですよ。だから私のような存在が居ればレースも盛り上がると思うのですがねぇ？」
「…それは、お前が経験したものか？」
「…おっと。私としたことが、つい熱が入ってしまいました。フフフ、さっきの話をどう捉えるか貴方次第ですよ、トレーナー？」
恐山トレーナーがその一言を言うと、流暢に喋っていたノイズサウンドははぐらかすように笑い、ランニングしに行った。
（こいつが、カイシンとはまた違う意味で問題児と言われる所以か…。）
とんでもないじゃじゃウマ娘を引き当ててしまったな。
運動後のストレッチをするカイシンと残った恐山トレーナーはそう独り言を言う。
だが、トレセン学園に所属するトレーナーとして、一癖二癖あるウマ娘達をターフの上で駆けさせる職業に居る以上、背に腹は代えられないと今後の予定を脳内で構築するのだった。

問題児、新たな日常に生きる

トレーナーが着いた後のノイズサウンドとカイシン。二人は恐山トレーナーのトレーニングスケジュールの元、来るデビュー戦に向け切磋琢磨をしていた。

「よし、今日はこれくらいにするぞ。」

恐山トレーナーが終了を告げるとノイズサウンドは肩に掛けたタオルで顔を拭って程よい疲労と成果を得たような様子だが、それと対照的にログマイヤは相変わらずヘロヘロの疲労困憊のような状態になりながら戻ってくる。

「と、トレーナーさぁ～ん…。わたしの悪癖ってぇ…どうすればぁ…。」

息絶え絶えのカイシンはアドバイスを要求するが、恐山トレーナーとノイズサウンドは二人揃って微妙な顔になった。

遡ること、一時間前。

「…嘘、ですよね…？これって、わたしなんですか…？」

併走トレーニングした時の様子を録画し、その時の様子を見せられたカイシンはいつもの間延びした口調ではなく、本気で絶望している声音で喋った。

これまで併走した相手はただ怖がるか、カイシンの前任トレーナーのように言葉を濁していた。それは、教えてしまえば自信喪失に繋がるかもしれないと言う優しさから来たものだった事が窺える。

「あぁ、紛れもなくお前だ。カイシン。」

「残念ながら貴女なんですよ、これ。」

「嘘だぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

しかし、恐山トレーナーとノイズサウンドはそんな優しさを無下にするようにキッパリと言い切った。言い切ってしまった。

今までの自分の走りを突き付けられたカイシンは、有名な映画の主人公のような慟哭をして、そのままトレーニングが始まったのだった。

敵が肉親だった

練習を終えた二人は、寮に向かって歩いていた、いつものように歩くノイズサウンド。だが、その隣でカイシンは目に見えて落ち込んだようにトボトボと歩いていた。
「はぁ…。後で一緒に走ってくれた子に謝りに行かなきゃ…。」
「律儀ですねぇ。もう貴女とは関わりのないウマ娘ですよ？知らぬ顔でいれば良いのではないですか？」
「でも、記憶が無くてもやったのはわたしなんですよ～…。だから、今まで一緒に走ってくれて、た…。」
「ん？どうかなさいましたか？」

突然、カイシンの言葉が途切れた事にノイズサウンドは不思議そうに尋ねたが、カイシンは何かを思い出したかのように顔面蒼白になりだし、そして、

「うわぁぁぁぁぁぁ!!!!」

突然叫び出した。周りにいた他のウマ娘はビックリして何事かと目を向けるが、カイシンはそれでも気にせずに取り乱し続ける。ノイズサウンドは何やら面白くなりそうだと思い、下唇を噛んで、にやけるのを我慢していた。
「ルドルフ会長!!最初にルドルフ会長に謝りに行かなきゃ!!あの時のわたし絶対ルドルフ会長に暴言吐いちゃってる！吐いちゃってるよね!?ノイズサウンドさん!!」
「…まぁ、『何が皇帝だ。』とか、『先頭を譲れ』とかは言ってましたね。」
「生徒会室に行ってきます!!!!先に帰ってて下さい!!!!」
カイシンはノイズサウンドの証言を聞くや否や、練習後だと言うの

に凄まじいスピードで走っていった。
「…クックックック。これからが新しい日常になることでどうなることかと思いましたが、これなら楽しくやっていけそうですねぇ。」
一人残ったノイズサウンドは必死に駆け抜けて行くカイシンの後ろ姿を見ながら不気味に笑い、一人寮へと戻って行ったのだった。
それがノイズサウンドにとって新たな友人を作る切っ掛けが訪れる事になる。

数日後。
その日はトレーニングが休みの日だった。ノイズサウンドは趣味であるスプラッタホラームービーやパニックムービーの鑑賞に一日を費やそうとしていた。
しかし、突然カイシンから『新しく出来た友達とカラオケ行きませんか？』と、連絡が入ったのだ。たまには新しい友達とやらを弄って、他の刺激でも味わおうかと気紛れで了承したノイズサウンドは待ち合わせのカラオケ店へと向かったのだが…
「何故、貴女が居るのですか？トウカイテイオーさん。」
「えー、何だよー。ボクじゃ役不足だって言いたいのー？」
カイシンの新しい友達は自分のライバルになるウマ娘だった。ノイズサウンドはブーブー言うトウカイテイオーに対応しながらも、カイシンに話しかける。
「と言うか、どういう経緯で友人になったのですか？カイシン。」
「あ～、それはね～。」
ノイズサウンドの疑問にカイシンは間延びした口調ながら話してくれた。

それはカイシンがシンボリルドルフに謝罪しようとした時だ。
「いた！す、すいません！会長!!」
丁度、校舎から出てきたシンボリルドルフにカイシンは呼び止めると、スライディングしてそのままシンボリルドルフの前で止まって土

下座をした。
「き、君は…？」
　突然、ウマ娘が自分の事を呼んだかと思ったら、土下座してくる状況にシンボリルドルフとその隣にいたウマ娘は戸惑いを隠せなかった。
「あの！模擬レースをさせてくださった中等部のカイシンです!!この間は、レース中に会長に暴言を吐いてすみませんでした!!お詫びに切腹でも何でも罰を甘んじて受けます!!だからどうか！どうか退学だけは勘弁してくださいぃぃぃぃぃ!!」
「えっ!?カイチョーと走ったあの!?て言うかどうしたの!?」
「ま、待て待て！事情は分かったが、そんなに自分を責めないでくれ。」
　饒舌に謝罪の言葉を述べるカイシンに同行していたウマ娘は混乱し、シンボリルドルフは落ち着くよう宥める。それでもカイシンは、まるで生まれたての子鹿のように震わせ、顔を地面に着けたままだった。
　困ったように笑ったシンボリルドルフは土下座しているカイシンの背中を優しく撫でた。背中を触られたカイシンはビクリと身体が跳ねるが、顔は伏せたままだ。
「顔を上げてくれ、カイシン君。私はあの時の君に大層驚いたが、別段気にしてはいない。」
「ほ、ほんとですかぁ…？」
　シンボリルドルフの言葉を聞いたカイシンは土と涙と鼻水まみれになった顔を上げる。
「あぁ。私も無敗でＧ１を勝ち続けてきたが、その道中も決して喝采ばかりではなかった。勝ち続ける私を非難する者、妬む者、火遊びをするように罵声を放つ者…。様々な声が耳に入ってきた。」
「会長…。」
「だから、罵声に関してはそれなりに耐性は付いているよ。それに、暴言以前に君の走りには私を追い抜きたいと言う気迫があった。それに応えない事こそが無礼だと思ったまでさ。」
　優しく語り掛けるシンボリルドルフにカイシンは涙が止まらなく

なった。これ程まで慈悲深い生徒会長に許してもらえた事が嬉しかったのだ。
「君の暴言についてだが、あれは私にしか聞こえなかったよ。安心してくれ。」
　そう付け加えた事でカイシンの緊張の糸が解けたようで土下座から尻餅を着くようにへたりこんだ。
「ふーん…。キミも中々大変みたいだねぇ。」
　その時、シンボリルドルフの隣にいたウマ娘、声が聞こえた。聞き覚えがある声にカイシンは視線を上げると、そこにいたのは…

「トウカイテイオーさんがいて、友達になってくれたと…。」
「うむ！ワガハイは未来の帝王サマになるウマ娘だからねー！友達になったのだー！」
「それに～、同学年だから仲良くなれたもんね～。」
「ねー！」
（これは、普段のカイシンが友達を作りやすいからか、それともトウカイテイオーさんのコミュニケーション能力が高いのか、もしくはその二つが合わさった結果なのか…。）
　いつの間にか意気投合したのか、和気あいあいとする二人にノイズサウンドは呆れ半分、感心半分の気持ちでいた。
「そう言えば聞きましたよ、トウカイテイオーさん。見事デビュー戦を勝利したらしいですね。」
「え？知っていたの？」
「まぁ、風の噂程度ですが、貴女の反応を見るに当たっていたようですね。」
「おぉ～！それじゃあ～、テイオーさんデビュー記念にぃ～、一緒に盛り上がろぉ～！」
「いぇーい！」
「私が言いたかったのは、そういうつもりではなかったのですが…まぁ、楽しみますか。」

早速曲を入れ始めた二人に流されるようにノイズサウンドも付き合わされた。ノイズサウンドは、共にクラシックで走り、しのぎを削り合う相手を知る良い機会だと割り切ることにした。

「はい次！ノイズサウンドの番だよ！」

トウカイテイオーとカイシンが一緒に盛り上がっている様子を眺めていたノイズサウンドはトウカイテイオーからマイクを渡されて困惑した。

「…私も？」

「あはは～、ノイズサウンドさんったら、カラオケに来たらやることは一つでしょ～？」

その様子を見ていたカイシンも笑う。だが、ウマ娘としてこれからはライブの練習もしなくてはならないと考えたノイズサウンドはまたも渋々ながら曲を入れた。

「ノイズサウンドってどんな歌を歌うのかなー？」

「楽しみだよね～、テイオーさん。」

ワクワクしている二人を尻目にノイズサウンドが入れた曲は、

「ヴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!!」

デスメタルだった。完全無防備だったトウカイテイオーとカイシンは鼓膜を叩くような音圧で繰り出されるデスボイスに圧倒され…

「…ふぅっ。スッキリしましたね。」

「す、スゴかったよ…。」

「ノ、ノイズサウンドさんのデスボイス…スゴい…。」

歌いきったノイズサウンドは晴れやかな顔を見せるなか、二人は撃沈していたのだった。

雑音、デビューをする

その後、トレーニングを積みに積んだノイズサウンドは晴れてデビュー戦へとやって来たのだが…。

「その…この間のトレーニング相手を人選ミスしたのは申し訳なかった。」

控え室のノイズサウンドはへの字になった口に腕を組み、片足をもう片方の足に乗せた姿勢という不機嫌な様子で座っており、恐山トレーナーは頭を下げていたのだった。

「えぇ、全くですよ。まぁ、誰でも良いと言ったのは私ですし？私も悪かったですよ？」

「そ、その割には～、不機嫌そうですよ～？」

こうなった原因は、デビュー戦前のトレーニングまで遡る。この時、カイシンはもう一人の人格を抑えながら走る練習のため、そしてノイズサウンドは他にもトレーニングしている（トウカイテイオーを除く）ウマ娘に嫌われ気味で、トレーニングに来ていたウマ娘のほとんどが目をそらし、関わろうとしなかったので恐山トレーナーは併走トレーニングは止めようとしたのだが、

「別に誰でも構いませんよ？」

と、ノイズサウンドが鶴の一声を放ったとこで恐山トレーナーは受けてくれそうなウマ娘のトレーナーを連れてきたのだったが…。

連れて来たのはトレセン学園で変人として有名なゴールドシップとそのトレーナーだったのだ。

ゴールドシップを見たノイズサウンドはいつもの笑顔が一気にへの字になり今までに見たことがない嫌そうな顔になった。明らかにテンションが落ちている。

ゴールドシップはそんなノイズサウンドの表情を気にもせず、

「よう、久しぶりだな紅ショウガ！アタシと一緒に宇宙に行きてぇって事か？遂にアンタもゴルシちゃん号の船員になる覚悟が出来たんだな！」

「私の名前はノイズサウンドですし、宇宙には行きませんし、そんなありもしない船の船員になった覚えはありませんよ。頭にちゃんと血液行き届いてるんですか貴女は。」
「おいおい、ノリが悪いなぁ。そんなんだからお前はヤキソバの具材にしかならねぇんだよ。そんなんじゃエデンなんか夢のまた夢のまた夢だぜ？かぁーっ！もっと素直に笑えよな⁉」
ワケの分からない解釈でノイズサウンドに話しかけた。対するノイズサウンドは嫌そうに否定してきたがゴールドシップの奇妙なマシンガントークに押し黙ってしまう。
後になって分かったことだが、ノイズサウンドはトレセン学園編入当初は色んな先輩に皮肉を込めた挨拶をしようとしていたらしい。
それこそ、生徒会の女帝エアグルーヴや皇帝シンボリルドルフに対してもだ。
しかし、最初にゴールドシップをターゲットに絞ってしまったのが運の尽きだった。
自由奔放で何を考えているか分からず、気分でレースをするなど、破天荒を地で行くウマ娘。それがゴールドシップだ。ノイズサウンドはこってりと搾られたそうで、それ以来ゴールドシップには近づかずにやり過ごしてきたらしい。
しかし、恐山トレーナーの人選ミスで遂に捕まってしまった。
「よっしゃ！紅ショウガ、お前との併走トレーニングでアタシが勝ったら、バンドを組んでくれ！それで漁船に乗りながらエデンを目指し、ハードなロックをかき鳴らして一位を目指そうぜ!!」
ゴールドシップは明らかにレースとは関係ない、もはや何を目指しているのか分からない斜め上の方向に突き抜けた条件を出しながらも併走トレーニングに付き合ってくれた。
しかし、そのトレーニングを行ったノイズサウンドの顔はいつもの人を見下すような笑みを浮かべる余裕は無く、Ｇ１レースに出場したウマ娘さながらの気迫があった。
さらに悲しいことに、偶々人格を抑えながら集中して走っていたカイシンの隣を通り過ぎて集中力を乱してしまい、ノイズサウンドはノ

リノリで追い掛けるゴールドシップと豹変したカイシンに追われる事となってしまったのだった。
「なんか…ゴールドシップがすいません…。」
申し訳なさそうに謝るゴールドシップのトレーナーに目の隅があるのを見た恐山はこいつも苦労しているのかと、サングラス越しに同情の目線を送った。

「今度からは、ゴールドシップなどと言う変人以外を、連れてきてくださいね。」
時間は戻ってデビュー戦の控え室。
ノイズサウンドはかなり念を押して、いつもよりも圧があるの笑顔で忠告した。その圧はいつも表情が変わらない恐山トレーナーすら頬が引きつるほどだった。
「分かった。分かったから、もう本番間近だ。その怒りをレースにぶつけてくれ。」
恐山トレーナーが説得するとノイズサウンドは鼻をならし、カツカツと早歩きで控え室から出ていった。

「あ。トレーナーさん、出てきましたよ。」
「頼むぞ…。掛かったりするなよ…。」
観客席へと移ったトレーナーとカイシンはゲート入っていくノイズサウンドを見守っていた。遠目からはどうなっているのか分からないが、掛からないことを祈る他無かった。

(はぁ、全く。ゴールドシップめ。何が素直に笑えだと？私の身の上も知らないくせに…！)
ゲートに入ったノイズサウンドはゴールドシップの奔放さにまだイラついていたが、出走の構えを取る。

（このフラストレーション、ぶつけてやりますよ…！）
ノイズサウンドが意気込んだ直後、ゲートが開き、レースが始まった。

「…あれ？」
「…うん？」
ゲートを注視していたカイシンと恐山トレーナーはノイズサウンドの走りに思わず声が出た。
『スタートです！おっと？最初に飛び出したのはノイズサウンドですね？追込だと聞いたのですが掛かっているのでしょうか？』
そう。ノイズサウンドが追込とは思えない先頭に出るスタートダッシュをしたのだ。
（掛かっているのか…!?やっぱり、俺の人選ミスかぁ…！）
「あわわ、トレーナーさんは悪くないですよ!?」
それを見た恐山は頭を抱え、カイシンにフォローされるのだった。
（おっと、私としたことが。平常心、平常心…。）
ノイズサウンドは、辺りを見渡して直ぐ様ペースを落とす。そこから冷静に辺りを見渡し始めた。
（さて…この人数と質なら軽々と追い越せますね。）
後方にポジションを納めたノイズサウンドはそこからじっくりと走るウマ娘達を観察し始める。
（よし…よし…ここのポジションで…よし。おや、そこに行くのですか。なら…）
ノイズサウンドは走りながら前にいるウマ娘達のルートを読みながら最良のポジションに着けていく。
『さぁ、最終コーナーを曲がって直線に入った！各ウマ娘はここからどう出るのでしょうか!?』
（抜けた！よし、このまま一気に突っ切れば…！）
集団から抜け出した一人のウマ娘が勝機と見て一気に駆け出した。
（見ててお姉ちゃん！私はこれから勝ってお姉ちゃんに良いとこ見せ

るから！）
段々近付くゴール。そこへ全力疾走しながらウマ娘は勝利の笑みを浮かべる。
（私の勝ち！）
希望に満ちた笑顔を見せた瞬間、視界の端から赤い影が躍り出た。
（…え？）
先頭を走っていたウマ娘が驚いている間にも、赤い影はどんどん小さくなっていく。
（い、急がなきゃ！）
慌てて差し返そうと加速するが、既に赤い影は突き放していった。
（そんな！勝ったと思ったのに…！）
もう誰も追い付けない。そう感じてしまうほどのスパートに、ウマ娘は自身の敗北を察した。
実況も熱が入り、声を荒げながら状況を伝える。
『ここで外から不気味に様子を伺っていたノイズサウンドが仕掛けてきた！スゴいスゴい！なんと言う末脚だ！バ群を外から追い抜き、そのまま突き放して行く！誰も追い付けない！』
ラストスパートで加速を続け、凶悪な笑みを浮かべたノイズサウンドが最前列で見ている恐山トレーナーとカイシンの前を通り過ぎていく。
「す、スゴい…。」
これまでノイズサウンドのラストスパートを見たことがなかったカイシンは間近で凄まじいスピードで通り過ぎていくノイズサウンドの走りに圧倒された。
「よく見ておけ。もう一人のお前は、このスピードに食らい付こうとしていた。その事をお前も覚えておきな。」
恐山トレーナーは内心安心し、そのままゴール板を通り抜けたノイズサウンドに目を向けながらも、カイシンに話し掛ける。
興奮したカイシンは更にはりきった。
「て、テレビで見るよりも迫力がスゴいなぁ…。よぉ～し、わたしもこんな感じで走るぞ～！」

「お前はまず、暴言恫喝するもう一人をどうにかしろ。じゃないとデビューは出さん。」
「…ですよね。」
『ノイズサウンド！他のウマ娘達相手に大差を開き、一着でゴールです！この赤いウマ娘はこれからのトゥインクルシリーズにどのような音を鳴らすのでしょうか!?』
結果はノイズサウンドの大差勝ち。興奮する観客達の歓声にノイズサウンドは涼しい顔で手を振り、応えた。
「…ふん、今に見てろ。そうやって笑ってられるのも、今のうちだから。」
その観客たちの中に、恨みを込めた目でノイズサウンドを見つめるウマ娘の姿があった。ノイズサウンドが一着を取ったのを見届けると、観客の合間を縫って、その場を去っていったのだった。

雑音、過去の因縁と再会する

ノイズサウンドが見事なデビューを果たした後、トレセン学園ではノイズサウンドの話題で持ちきりだった。
あの選抜レースを出て場を荒らしていただけのウマ娘が？
シンボリルドルフと同じ無敗三冠を挑むトウカイテイオーを阻むのか？
そもそも何でデビューできたのか？
そんな話題の中心にいながらも、ノイズサウンドは特に気にすることなく、登校をしていた。
ノイズサウンドは自分のクラスに入ると一瞬、クラス中のウマ娘の視線が集中するが、それだけでまたそれぞれのグループで会話し始めた。
「あ、あの、ノイズサウンドさん、おはよう。」
席に着いたノイズサウンドの隣から、か細い声がノイズサウンドに挨拶をした。
「やぁ、ライスシャワーさん。おはようございます。」
挨拶をしたのは体が小さく、片目が隠れるほど伸びた前髪、そして青薔薇が飾られた帽子がトレードマークのウマ娘、ライスシャワーだった。
「ノイズサウンドさん、デビュー戦を勝てたんだね。おめでとう。」
「えぇ、どうも。」
ライスシャワーが祝ってくれるが、ノイズサウンドは特段喜ぶこともせず、礼だけで済ませた。

この二人が会話する程になったのはノイズサウンドが編入後の話になる。
「はぁ…はぁ…。くっ、あのゴールドシップとやら、随分と厄介なウマ娘ですね…。とりあえず、何処かに隠れなければ…！」
ゴールドシップというやぶ蛇をつついてしまったノイズサウンドは身を隠す場所を探して図書室へと訪れていた。

その時、読書中だったライスシャワーが目に入った。
「もし、そこの方。」
「ふぇっ？わ、私？」
「今、私は変人に追われているのです。もし、ここに私を探しに来たウマ娘がいても見なかったと言ってください！では！」
ノイズサウンドは、何がなんでもゴールドシップの追跡を振り切りたかったので藁にもすがる想いでライスシャワーに庇ってほしいと言った後、そそくさと図書室の奥へと消えていった。
「おーい！どこだ紅ショウガ！くっそー…ここら辺に来たと思うんだけどなぁ…。」
ノイズサウンドが隠れた直後にゴールドシップが図書室へとやって来た。
ゴールドシップは何かを探すように図書室を見回すとポカンとしているライスシャワーと目が合った。
「あっ！なぁなぁ、お前。この辺に紅ショウガ来なかったか？なんか、赤くてひょろっちい奴！」
「え、あ、ご、ごめんなさい…。ライスは見てないです…。」
「くっそー！ゴルシちゃんレーダーが故障してんのか？まぁいいや！ここの生徒だからどうせすぐ会えるだろ！じゃなー！」
ゴールドシップは悔しがったかと思えばすぐに開き直って図書室を出ていった。残ったライスシャワーは嵐のように現れ、風のように去っていったゴールドシップに呆然としていたが、すぐに庇ったウマ娘を呼んだ。
「あ、あの、もう行きましたよ…ベニショウガさん？」
「ふぅ、庇ってくれてありがとうございます。あと、私の名前はノイズサウンドです。」

それ以来、ライスシャワーはノイズサウンドとそれなりに話す程度では仲良しになったのだ。
「皆さん！席に着いてください！」
その時、クラスの担任がやって来て会話はそこで途切れた。教卓へ

移動した担任は着席したウマ娘たちを見て話し始めた。
「えー、今日は地方から転入生がやって来ます。」
担任のその言葉に一瞬ざわめくクラス。地方からやって来たウマ娘として真っ先に思い浮かぶのは、北海道からやって来て、ダービーを制してそれからもＧ１で好成績を残したオグリキャップやスペシャルウィークが思い浮かぶ。
ざわめくクラスメイト達を宥めた担任が新しく入るウマ娘を呼んだ。
入ってきたウマ娘は正に清楚という言葉が似合うような立ち振舞いと容姿だった。短く、綺麗に切り揃えられた髪型と、にこやかな笑顔が人付き合いの良さを醸し出している。
「初めまして。地方からここ、中央にスカウトされてきました。コモーノーデスです！」
にこやかに挨拶したそのウマ娘に拍手が起こる。
「わぁ…。地方から来たって、まるでオグリキャップさんみたいだね。ねぇ、ノイズサウンドさ…」
ライスシャワーも拍手をして、ふとノイズサウンドに声をかけようとしたが、その言葉を詰まらせてしまった。
ノイズサウンドの顔はいつものような意地の悪い笑みではなく、目が見開き、口も閉じて、感情が無くしたような顔で固まっていた。
（の、ノイズサウンドさん…？）
ライスシャワーはいつもと様子が違うノイズサウンドの顔を見ていたが、ノイズサウンドはすぐにいつもの笑顔に戻った。コモーノーデスの紹介が続くなか、ライスシャワーはノイズサウンドが気掛かりだった。
「へぇー！釜瀬（かませ）トレーナーって、あの名門出身で顔が良くて注目のトレーナーでしょ？そんな人にスカウトされてきたってスゴいじゃん！」
「逃げって言ってたけどさ、どんな感じの逃げをするのかな？もしかして、サイレンススズカさんみたいな大逃げ？」

「あはは、私なんかがあのサイレンススズカさんと並べられるの恐れ多いですよ～。」
　昼休みにコモーノーデスはクラスメイトに囲まれ質問攻めに会っていた。しかし、そのウマ娘の集団をノイズサウンドとライスシャワーはあぶれているような位置で眺めていた。
「あ、あの、ノイズサウンドさん、転入生のコモーノーデスさんって、知ってる人なんですか？」
　ライスシャワーは、自己紹介でコモーノーデスを見た瞬間のノイズサウンドが見せた表情が気になり、恐る恐る質問してみた。ノイズサウンドはライスシャワーを一瞥した後、顎に手を添え、何か考えるような仕草をして口を開いた。
「ふむ、まぁ、何と言いますか…」
「ねぇ！あなたが噂の問題児さん？」
　しかし、クラスメイトの集団から抜け出したのか、ノイズサウンドの言葉を遮るようにコモーノーデスがノイズサウンドに話し掛けてきた。ライスシャワーはビクリと身体を強張らせ、ノイズサウンドは一瞬目を細めた。
「…まぁ、よく言われてますね。」
「地方じゃそういう人居なかったから興味があるんです！ちょっと二人で話してもいいですか？」
「…まぁ、良いでしょう。では行きましょうか。」
「ありがとう！ごめんね、ちょっと問題児さん借りるね？」
「う、うん…。」
　コモーノーデスはライスシャワーに断りを入れるとノイズサウンドと一緒にクラスを出ていった。
（だ、大丈夫かな…ノイズサウンドさん…。）
　ノイズサウンドの表情から見て、コモーノーデスとの関係は良好ではないだろう。ライスシャワーは出ていく二人の背中を見て不安になった。

「いやぁ、お久しぶりですね。まさか貴女が中央に来るとは、驚きましたよ。元気でしたか？」
　誰も居ない校舎の屋上でノイズサウンドはコモーノーデスに軽く話し掛けた。
「はっ、そう言うあんたはこのトレセン学園で問題児って呼ばれてんの？アタシを踏み台にして中央に来たってのに、何その体たらく。そんなあんたに元気かどうか聞かれたくないんだけど？」
　しかし、コモーノーデスはさっきまでの優等生っぷりが嘘だったかのような、冷たい顔に豹変した。
「つーか、見たよデビュー戦。あの時のまんまで追込やってんの？ズルズル引きずって走ってんの笑えるんだけど。」
「……。」
「何か言いなよ？そうやって気色悪い笑顔でヘラヘラしてんの腹立つんだよ。バカにしてんの？」
「…生憎、何処かの誰かのせいでそうなった訳ですので。」
「は？アタシのせいって言いたいわけ？」
「誰も貴女のせいとは…」
　ノイズサウンドが否定しようとした瞬間、コモーノーデスがノイズサウンドの襟首を掴んできた。
「ふざけんじゃないよ！何であんたみたいな親の顔も知らない孤児の落ちこぼれ風情がアタシより優れてるとか意味分かんないんだよ！」
「まぁまぁ、そうカリカリしないでくださいよ。折角中央に来れてめでたいのに何に怒っているのですか？」
「あんたのせいだよ！あんたのせいでアタシのレース人生出遅れてるって言いたいんだよ！今、ここで足折ってやってやろうか!?」
　コモーノーデスはそのままノイズサウンドを壁に叩き付け脅す。だが、ノイズサウンドはそれでも相手を嗤うかのような表情を崩さない。コモーノーデスはそんなノイズサウンドにイラつき、脛を狙って蹴ろうと足を上げた瞬間、
「あーもー、うっさい！さっきから寝られないんだけど！喧嘩ならよそでやれっての！」

屋上に先客が居たのか声が聞こえた。コモーノーデスは慌ててノイズサウンドの襟首を掴んでいた手を離し、取り繕った。
現れたのは、ライスシャワーと同じくらい体躯の小さい、しかし、目に宿った闘志が鋭いウマ娘だった。
「ご、ごめんなさ～い！ナリタタイシンさんの昼寝場所だったんですね～！そうとは知らずすいませ～ん！」
すぐに猫を被ったコモーノーデスはペコペコと謝りだした。
ナリタタイシン。彼女もトレセン学園に通っているウマ娘で『ＢＮＷ』と言う三人組の内の一人でそれぞれ皐月賞、日本ダービー、菊花賞を競い合い、それぞれ勝っており、その年のクラシックを盛り上げた事で有名なウマ娘だ。ちなみに、ナリタタイシンは皐月賞を制している。
「はぁ…。そこの赤いあんた、大丈夫？」
ナリタタイシンはノイズサウンドとコモーノーデスの二人を見て、先程の会話の内容から、ノイズサウンドの心配をした。
「ええ、怪我はないですよ。ご心配無く。」
ノイズサウンドは制服を整えながらナリタタイシンに礼を言う。それが気に食わなかったのか、コモーノーデスはナリタタイシンに低姿勢で媚を売るように謝りだした。
「な、ナリタタイシンさん、お昼寝を邪魔して本当にごめんなさい～。」
「何回も言わなくても聞こえてるっての。ったく、寝る気無くなった。」
ナリタタイシンはコモーノーデスを雑にあしらうと頭を掻きながらその場を去っていった。
ナリタタイシンが階段を降りる音を聞き、本当に二人きりになった事を確認したコモーノーデスはまたもノイズサウンドを睨み付けた。
「…あんたのせいでナリタタイシンさんに怒られたじゃん。」
「それは理不尽では？」
「あんたのせいに決まってんでしょ！見てなよ、アタシもクラシック走ってあんたに吠え面かかせてやる！」
コモーノーデスは捨て台詞を吐き、そのまま屋上を降りていった。

残ったノイズサウンドはいつもの笑顔でふぅ。とため息を吐くと後を追うように屋上を後にしたのだった。

二重人格者、レースをする。

「はっはっはっは…。ふぅ～っ。」
ノイズサウンドが絡まれた後、トレーニングの時間になった。
ノイズサウンドと併走トレーニングしていたカイシンは度重なる指導と、ノイズサウンドのデビュー戦で上がったモチベーションにより、少しずつだが暴言を吐く回数が減っていき、遂に目標の距離まで人格を維持できるようになっていた。
「いやはや、もう少し掛かるかと思っていましたが、マイル距離まで維持できるようになるとは予想外でしたよ。」
「と、とは言っても、まだ全力は、出さずに走ってますからぁ～…。」
カイシンの言う通り、併走トレーニングではもう一つの人格を理性で抑えつけた状態で走っているのだ。レース、特に最終直線のラストスパートは正に全身全霊で行っているウマ娘も少なくない。
カイシンの弁を聞いたノイズサウンドは、ふむと考えるように顎に手を添えた。
「ならば、模擬レースをしてチェックしてみましょうか。トレーナーさん。少し良いですか？」
ノイズサウンドが恐山トレーナーに走りをチェックしてもらおうと頼みに行くと、恐山は見慣れないトレーナーと先程脛を踏み蹴ろうとしたウマ娘に絡まれていた。
「…で、そいつが噂の…。」
「そう！この僕がローカルシリーズのレース場からスカウトしてきたコモーノーデスさ！地方で燻っていた宝を見つけたこの僕の眼でね！」
「はぁ～い！コモーノーデスです！よろしくお願いします！顔の怖いトレーナーさん♪」
恐山は表情こそは変わらないが、『地方から来たウマ娘？実力見てないから至極どうでもいいし、お前の慧眼もどうでもいい。』と言いたげな雰囲気を醸し出している。それでも、キザなトレーナーは天狗にでもなったかのように地方からコモーノーデスをスカウトしてきた

事を雄弁に語っていた。
（…ほう、あれがコモーを中央へ連れてきた張本人ですか。）
　確か、名前は釜瀬と言ったか。そんな事を思い出しながら、ノイズサウンドは極力釜瀬とコモーノーデスを視界に入れないように恐山トレーナーの元へと向かった。
「よろしいですかな？トレーナーさん。」
「ノイズサウンドか、どうした？」
　ノイズサウンドに呼び掛けられた恐山は、すぐに二人に興味を無くしたように振り向く。自慢話によっぽどうんざりしていたのが見て取れる。
「先程、カイシンと併走トレーニングを行っていたのですが、カイシンはマイル距離まで自制して走れるようになりました。それで、提案なのですが…」
「ほう？併走トレーニング？なら、コモーノーデスの出番だな！この娘のスピードになら良いトレーニングにもなるだろう！コモーもいいかい？」
「えぇ！良いですよ！まだデビュー出来てない後輩ちゃんの力になれるように付き合ってあげます！」
　話を中断されたことが気に障ったのか、釜瀬トレーナーはコモーノーデスをカイシンのトレーニングに付き合わせようと割り込んできた。
「俺は別に構わないが…。おい、ノイズサウンド。」
　恐山はノイズサウンドを連れて二人から少し離れた場所でヒソヒソ話し始めた。
「大丈夫なのか？カイシンはマイル距離まで走れるようになったとはいえ、まだ不安材料は残ってるぞ？」
「クックックッ、ご心配無く。あのコモーノーデスというウマ娘は私と同郷のウマ娘でしてね。少しばかり中央の恐ろしさを身をもって体感させてやろうかと思っているのですが、どうでしょうか？」
　ノイズサウンドの言葉を聞いて恐山トレーナーは賛成したかったが、あのカイシンだ。もし問題を起こしてしまったらどう責任を取れ

るのか。万が一の事があるので聞くことにした。
「確かに…。だが、それであのコモーノーデスが今後のレースで尻込みしてしまうようになったら…。」
「その程度の実力のウマ娘だった。それで十分ですよ。」
「…お前、あのコモーノーデスに何かされたのか？随分と私怨が籠ってるぞ？」
「未遂ですが、転校初日に私の脛を蹴ろうとしましたね。」
「よし、釜瀬トレーナー。あんたのコモーノーデスとうちのカイシンで模擬レースをしてくれないか？」
「はっはっは！良いとも！コモー、行くぞ！」
「はーい！釜瀬トレーナー！」
　恐山トレーナーはノイズサウンドが言い終わる前に釜瀬トレーナーの元へと向かい、模擬レースを申し込んだ。自分が鍛えているウマ娘に、それも大事な脚に怪我を負わせようとしたから当然の反応なのだがその様子を後ろから見ているノイズサウンドは悪い笑みを浮かべているのだった。

「芝の２４００。これで行くぞ。二人とも用意は良いか？」
「はぁーい！分かりましたー♪」
「は、はいっ！おねぎゃいしますっ！」
　恐山が走る前に確認を取ると、コモーノーデスは自身たっぷりに、カイシンは緊張気味ながら頷いた。
　ノイズサウンドは二人の走りを見物しようとしていたのだが、
「…それで、貴女は何故、私の隣にいるのですか？トウカイテイオーさん。」
「えー、別にいいじゃん。あのコモーノーデスってクラシック路線行くって話を聞いたからどんな走りをするのかなーって見に来たんだよ？」
　釜瀬トレーナーの声が大きかったせいで他にも練習していたウマ娘やトレーナー達が話題の地方から来たウマ娘の実力をこの目で見

ようと集まってきたのだ。
　そしてノイズサウンドの隣にはトウカイテイオーが来た。ノイズサウンドはカラオケの時のように自分に物怖じせず接してくるトウカイテイオーには少しばかり苦手意識を感じていたのだが、トウカイテイオーはそんなのはお構いなしなのだろう。どう対応するか考えている内に恐山が手を上げた。
「よーい…スタート！」
　恐山の手を振り下ろす合図と同時に駆け出すカイシンとコモーノーデス。スタートダッシュは二人とも良好のようだが、恐山は安心できなかった。
（アイツは最初は良いんだ。だが、問題は最終コーナーから直線のスパート…。気性難のアイツがマイル距離まで抑える事は出来たとしても中距離、それも日本ダービーと同じ距離を走れるのか？）
　恐山の視線の先には逃げの戦法で悠々と走るコモーノーデスを脚を溜めるように追うカイシン。カイシンはシンボリルドルフとの模擬レースで見せた先行ではなく、ノイズサウンドと同じ追込の戦法で走っている。ノイズサウンド曰く、カイシンはこっちの方が本領を発揮できると言っていた。それに関しては恐山は賛成なのだが…
（ノイズサウンドは中距離を提案した。一体どういうつもりだ？）
　横目でノイズサウンドを見たが、ノイズサウンドはトウカイテイオーの隣でいつもと変わらない、何を考えているのか分からない笑みを浮かべて一緒にレース展開を見守っているだけだ。
　併走トレーニングをして間近で見ていたからこそ、何か秘策があるのか？そう考えている内に走っている二人は最終コーナーに差し掛かった。
（ふん！まだデビュー前のウマ娘風情にアタシが負けるわけないじゃん。ノイズサウンドの奴、後輩いじめでもしてんの？さいってーじゃん。）
　最後の直線。先頭で走るコモーノーデスは心の中でノイズサウンドを批判する。後ろに耳を向けてみたがカイシンの足音は小さい。

これぐらいならスパート掛けないままでも余裕で勝てるだろう。コモーノーデスはノイズサウンドをどう貶すか考えながら余裕の表情を浮かべるのだった。

「あれ？スパート、掛けないのかな？」

（やはり！奴は八百長まみれの地方からやって来たウマ娘だ。相手がまだデビュー前という前情報のみで高を括っていると踏んだのですが、どうやら正解のようですね。クックックッ…。）

最終直線で余裕そうに走っているコモーノーデスを見たトウカイテイオーはポツリとそんな言葉をこぼし、ノイズサウンドはコモーノーデスが自分の予想通りに走ってくれた事に口角を上げ、邪悪な笑みを浮かべたのだ。そして、

（どういうつもりなんだろう…ノイズサウンドさんは…。）

カイシンは最終コーナーでレース前にノイズサウンドに耳打ちされた作戦を思い出す。

『いいですか？最終コーナーで理性で抑えるのを止めるのです。』

『分かりました！最終コーナーで…へ？』

思わず了解しかけたカイシンはすんでのところで止まり、どうしてなのか聞いてみた。が、ノイズサウンドははぐらかすばかりで話してくれなかった。

だが、ずっと一緒に併走トレーニングをしてくれたノイズサウンドだから分かるところがあるのだろう。あの時は不安しかなかったが、今、先頭を走るコモーノーデスを見ていく内にカイシンの中にふつふつと勝ちに対する欲求が沸き上がってきた。

（でも、勝ちたい…。勝ちたい！あの走りは俺（わたし）を貶している走りだ！あんな奴には負けたくない！向こうは地方からやって来たかなんてどうでもいい。勝つ、勝つ、絶対勝つ!!誰だろうが勝ってやる!!!あああもう、我慢できない!!信じますよ、ノイズサウンドさん!!）

カイシンはノイズサウンドを信じてその意識を落としていった。

（よし！この勝負、アタシの…？）
勝ちを確信したコモーノーデス。しかし、そんな彼女の後ろから風が巻き起こった。
「…え？」
その正体は風ではなく、後ろにいるはずだったカイシンだ。
コモーノーデスは間抜けな声を出すが、その理由は追い抜かれた事ではなく、その走り方に呆気に取られたのだ。
トウカイテイオーはカイシンのラストスパートの一部始終を見てそう言葉を漏らした。
「す、スゴい走り…。あれって、ホントにカイシンなの…？」
トウカイテイオーはこれまでカイシンがノイズサウンドと併走トレーニングをしている姿を見かけていた。だが、今走っているのが同一人物なのか疑わしくなったのも無理はない。
何せ、走りながら突然ガクリと意識が失ったように頭を下げたと思ったら急に加速し始めたのだ。
前半のカイシンのフォームは良くて安定した、悪く言うと地味な走り。それこそ、コモーノーデスが負けるわけがないと高を括っていた走りだ。
しかし、今、コモーノーデスの前を走っているウマ娘のフォームは姿こそカイシンだが、脚の運びや手の振りは荒々しく、粗雑で、まるで制御不能になった暴走機関車のような力任せの走りだ。下手に近付くと弾き飛ばされそうな気迫が後ろ姿からも感じた。コモーノーデスの実力を見に来た野次ウマ達もまさかの展開にどよめき始める。
「うぉららららららららららぁあああああっっっっっっっ！！！！！！！」
「んのっ！はぁあああああ！！」
雄叫びをあげながら引き離すカイシンにコモーノーデスは差し返そうとスパート掛け始めた。だが、既にカイシンは2バ身ほど引き離しており、差し返せる距離ではなかった。結局、カイシンは3バ身半差の勝利を手にしたのだった。

まさかのどんでん返しに野次ウマのウマ娘やトレーナー達はどよめきから一人、また一人と拍手を始めた。
レースに絶対はない。
その言葉があるからこその拍手だった。

「っしゃあああっっ!!!!しゃっ!しゃっ!っしゃあああああああああはははははぁぁぁぁ〜…疲れたぁ〜…。」
ゴールしたカイシンは勝利の実感を身体で表現するように声に合わせて何度も拳を空高く突き上げたが、すぐに元のカイシンに戻ってターフの上に仰向けに倒れた。
「おめでとうございます、カイシン!ああ、なんと素晴らしい末脚でしょうか!!」
「おう、見事だったぞ。」
「カイシーン!こんなにスゴいなんてビックリしたよ!次はボクと走ってよ!」
ノイズサウンドは寝転ぶカイシンを覗き込み、讃えるように誉め、一緒に覗き込む恐山も僅かに上がった口角で満足なのが見て取れた。
更に、友人のトウカイテイオーも併走トレーニングの申し出をしてきた。カイシンは自分は勝ったんだと、そしてこんな問題がある自分に併走トレーニングを頼んでくれる良き友人に出会えたと疲労困憊の顔に笑顔を見せたのだった。

「はっはっはっ…!?」
一方、負けてしまったコモーノーデスは膝に手をつき、肩で息をしながら呆然としていた。
(嘘でしょ!?何であんなデビューしてないウマ娘風情にアタシが負けるの!?これが中央のレベルだってこと…!?…いや、ノイズサウンドはそれを見越して模擬レースを持ち掛けたの!?)
コモーノーデスは絶望しているが、実は余裕で勝てると判断した甘さが招いた結果なのだ。もし、普段のレース通りにスパートを掛けていたらカイシンは差しきれなかっただろう。それを怠ったからこそ、

敗北に繋がったのだ。
　コモーノーデスはカイシンを誉めるノイズサウンドを睨み付けると目があった。その時、ノイズサウンドは笑みを浮かべたが、コモーノーデスにはこう言っているように見えた。

　勝てると思ってたお前の姿は道化だったし、滑稽だったよ。

「コモー!・大丈夫だったか!?」
　釜瀬トレーナーが飛んできて心配そうに声をかけて来た。コモーノーデスは怒りを内に潜めて、泣きそうな表情を見せた。
「トレーナーさぁ～ん!・カイシンちゃんが怖かったですよぉ～!・」
「よしよし。怪我はないようで安心したよ。まさか、デビュー前にあんな伏兵がいるとは思わなかった…。よし!・明日からクラシック戦線で勝てるようトレーニングを頑張ろう!・」
「はぁ～い!・コモー、頑張りまぁ～す!!」
　ぶりっ子の声を出しながら、コモーノーデスはノイズサウンドろカイシンをレースで貶めてやろうと奮起するのだった。

雑音、母性を知る

ある日のこと。ノイズサウンドはいつもよりも遅く来て、いつもの笑顔が微妙に陰ったような状態でトレーニング場に来た。
「何かあったか?…まさか、またあの…!」
異変を感じた恐山はまたコモーノーデスが何か絡んできたのかと思い、尋ねると、ノイズサウンドは首を横に振り、否定した。
「違いますよ…いえ、違わなくはないのですが、その後が…。」
そこまで言ったノイズサウンドは嫌そうな顔をして、それ以降、口を閉ざしてしまった。余程思い出したくないのだろうと察した恐山は後ろ髪を引かれる気分だったがそれ以上触れない事にした。

「ふぅ〜…、ふぅ〜…。」
「カイシン!併走してくれてありがとねっ!」
カイシンはあの日以来、主に上昇志向が強いウマ娘に併走トレーニングを誘われる機会が多くなった。ただし、恐山はカイシンとの併走トレーニングに制限をつけた。
走ってもいいのは一日二人まで、距離はマイルまで、極力離しすぎない。という三つだ。
これ等はノイズサウンドで検証して分かった事で、カイシンと併走トレーニングを行う前に恐山が説明するようになったのだが、これのお陰か、カイシンが暴言を吐くことなく走れている。
「でも、カイシンも大変だよねぇ。もう一人の自分を抑えながら走ってるんでしょ?今はどんな気分なの?」
この日はトウカイテイオーが併走トレーニングの相手だった。カイシンの事情を理解している一人であるテイオーはもう一つの人格がどうしているか尋ねる。これも、恐山からの頼みで、併走トレーニングを終えたら今はどんな気分なのか教えてほしいと言われたのだ。
「うぅ〜ん…何だろう?すっごいムカムカしているけど、テイオーさんだからかな…?今のところ、併走してくれた人でこうなったの、今のところテイオーさんとミホノブルボンさんとノイズサウンドさん

だけなんだよねぇ…。」
「ふぅ～ん…。ミホノブルボンって、あのロボットっぽい子だよね？まだデビューしてないけど、ブルボンもいい走りをしているよね。もしかしたら、カイシンとクラシック路線で競い合うかもね。」
「そ、それまでに自分を制御出来るようになっておかないといけないけどね…。」
　カイシンは苦笑いしながらテイオーの言葉を返す。既に今年のデビュー戦のシーズンは終わってしまっており、カイシンは来年までにデビューができない状況になっていた。
　しかし、裏を返せばそれまでに悪癖の改善に取り組めるという事なので、カイシンはむしろチャンスだと感じているのだ。
「ところでさ、ノイズサウンドはどうしたの？なんか不機嫌そうだけど…。」
　そこに、テイオーがノイズサウンドの耳に入らないようカイシンにひそひそと聞いてきた。ノイズサウンドの異変はカイシンもテイオーも察してはいたが、理由は聞けずじまいだった。
「うぅ～ん…ゴールドシップさんに絡まれたならもっと不機嫌そうだけど、あのコモーノーデスさんの事も気にも止めてないから…何だろう？」
　カイシンも理由は分からず首を捻るのだった。

「はぁ…はぁ…はぁ…。」
　坂路トレーニングを終えたノイズサウンドは膝に手をつき、肩で息をする。そして、トレーニングへ来るまで起こった出来事を思い出していた。

「あんたのお陰でアタシなんて言われたか分かってんの!?この悪魔め!!」
　昼休み、コモーノーデスはノイズサウンドを人通りの少ない場所に連れ出し、壁に叩きつけながら問い詰めた。だが、ノイズサウンドは変わらず仮面のような笑みを浮かべるだけだ。

「さぁ、何でしょうか？」
「デビューしてないウマ娘に負ける田舎者よ…！アタシの華々しいクラシックデビューに泥付けるような事しやがって…！」
「それはごく一部の意見では？少なくともクラスメイトたちは何も…」
「黙んなさいよ！このでくの坊！」
　コモーノーデスはあんたのせいでと恨み節をノイズサウンドにぶつけながら地面に投げ出す。しかし、ノイズサウンドはそれでも手を上げず、ただなすがままの状態だ。
「何なのよあんたは…！いっつもいっつもアタシの邪魔ばっかりして！なんか恨みでもあるの!?」
　コモーノーデスはノイズサウンドの制服の襟首を掴み、問い詰める。だが、ノイズサウンドは不気味な笑顔でただただ、見つめ返してくるだけだ。
　言い返さないノイズサウンドに、しびれを切らしたコモーノーデスは叫ぶ。
「…っこの、ヘラヘラ笑ってないでなんか言い返せよ！この親知らず！」
「では、言わせて頂きます。今、この現場を誰かが見たらどちらが悪者になりますかね？」
　ノイズサウンドの言葉にハッとしたような表情になったコモーノーデスは、ノイズサウンドから乱暴に手を離すとイラついたように歯噛みをして、そのまま立ち去っていった。
（全く…、私ごときに時間を無駄にしているようでは、ね。）
　一人残ったノイズサウンドはコモーノーデスの行動に呆れながらも立ち上がる。制服もよれて、土が付いたが別に気にするほどではないだろう。
（それよりも、今日はトレーニングでしたね。早速向かわなければ。）
　今日の予定を思い出したノイズサウンドはトレーニング場へと向かおうとした。が、
「あら…？そこのあなた！大丈夫かしら？」

「うん？」
　更衣室に向かう最中に声をかけられた。ノイズサウンドは立ち止まり振り向くと、声の主を見てすぐに無視すれば良かったと後悔した。
「制服が汚れちゃってる…転んだのかしら？」
　声をかけたのはとても柔和で母性溢れる印象を持つウマ娘、スーパークリークだった。
　コモーノーデスに絡まれた時に乱れた服装から心配そうに近付くスーパークリーク。
「いえいえ、特に何も。ご心配をお掛けしましたね。」
　だが、ノイズサウンドは軽くあしらって立ち去ろうとした。
　スーパークリークの自分のトレーナーの頭すら撫でる甘やかしっぷりはノイズサウンドも知っている。このまま話していたら、トレーニングの時間が無駄になると感じたからだ。
「こらこら。強がっちゃいけませんよ？そうやって無理しちゃって大怪我しちゃったら大変ですよ？私に話してみなさい？」
　しかし、スーパークリークは引き下がらない。大勢の子供達を世話したことがあり、一時期、トレーナーが多忙で甘やかせない状況が続いた時に調子を崩してしまう事があるほどだ。
　それほど世話好きのスーパークリークの目にはノイズサウンドの制服の状態から、何かあったのでは？と感じたのだ。
「…あのですね。私は今からトレーニングに行かなくちゃいけないのですよ。その時間を無駄にしたくないわけでして、貴女のご厚意はありがたいのですが気持ちだけでじゅうぶ…。」
「こぉーら！意地張らないの！」
　ノイズサウンドは真正面から断ろうとした瞬間、顔中が柔らかい感触に包まれた。
　スーパークリークが抱きしめてきたのだ。
「うっぷ!?あ、あの、スーパークリークさん？意地など張っていませんので離してくださいませんか？というか、この状況が嫌なのですが？」

「うふふ、そう恥ずかしがらなくても良いのよ？」
ノイズサウンドは何とか引き離そうとするも、スーパークリークの慈母のような微笑みと抱擁に力が抜けそうになった。
（こ、これは…今まで感じたことがない感覚だ…。まるで、温かな布団に包まれているかのような…。）
初めての感覚にノイズサウンドは最初こそ戸惑ったが、段々と気持ち良くなり、いつもの笑顔が段々と力が抜けたようにふやけていく。しかし、すぐに我に帰った。
（ま、まずい！このまま受け入れたら、私の何かが崩れそうになる！私が私たるのに必要なものが！）
「あの！本当に結構ですので！」
ノイズサウンドは危機感を覚え、何とかスーパークリークを引き離すとそのまま逃げ出した。
「あっ！待ちなさぁーい！」
だが、後ろからスーパークリークが自分を呼び止める声を聞こえる。
捕まればもう逃れられない。そう感じたノイズサウンドは追跡を振り切ろうと更に加速した。
こうしたやり取りがあったために、トレーニングに遅れ、少し笑顔に陰りがあったのだ。
（スーパークリーク…。今まで理由なく避けていましたが、今なら分かります…。彼女の母性は私の何かを崩してくるんだ…。それも自我を形成するために必要なものを…。）
もし、あの抱擁を抗うことなく受け入れていたら…。
悪寒を感じたノイズサウンドはそれを振り切るようにトレーニングを再開するのだった。

問題児、正月を迎える

1月。世間一般的には新しい年の始まりであり、正月でもある。寒空の下で人々は一年の目標を立てたり、神頼みしたりと、形は様々ながら新しい年の区切りで気合いを入れ直す。そのような時期なのだ。

「トレーナーさぁ～ん！ノイズさぁ～ん！」

「おや、カイシン。明けましておめでとうございます。」

「おう。」

それは、この三人にとっても違いはない。黒のコートに身を包んだ恐山、トレセン学園の制服を着たノイズサウンドとカイシン。三人は神社の前で待ち合わせをしていたのだ。

「ふぅ、ふぅ。もしかして、わたしが最後ですかぁ？待たせちゃいましたかぁ？」

「そうですねぇ。そりゃあ待ちましたよ。」

最後に来たカイシンはノイズサウンドの言葉を聞き、ジト目でノイズサウンドを睨み付けた。

「嘘ですよね？ノイズさんはわたしを弄るとき、そうやって意地悪な笑顔をしていますよね？」

「まさかまさか。私のこの顔はいつも通りのはずですが？」

「むーっ！そうやって煙に撒いたって！」

「それよりも初詣だ。さっさと行くぞ。」

じゃれ合う二人に恐山トレーナーは親指で神社に行こうと促す。新年になろうがいつものような掛け合いをする三人。

「今年こそは！デビューできますように！」

（ノイズサウンドのクラシック活躍とカイシンのデビューに無病息災を…。）

（今年のクラシックで私は…。）

神社の賽銭箱の前で三人は手を合わせ、カイシンは手を擦り合わせ必死に、ノイズサウンドと恐山は静かに願掛けをするのだった。

「さて、これから何をしますか？」

「うん？そうだな…。」
　初詣を終えた後、ノイズサウンドは恐山に話を振った。恐山はどうやらこの後の予定を考えていなかったようで顎に手を添え考え始める。
「はいはぁ～い！折角の正月だからぁ、お休みしませんかぁ？ほら、ノイズさんのレースの色々振り返りながら…。」
　カイシンはこれまでトレーニング詰めだった自身とノイズサウンドの為に振り返りを兼ねた休息をしないかと提案した。
「…それもそうだな。ノイズサウンドはどうだ？」
　恐山はカイシンの案に賛成するとノイズサウンドに確認を取る。ノイズサウンドも別に良いと言わんばかりに肩をすくめた。
「よし、この後トレーナールームに来い。去年のノイズサウンドのレースやカイシンの練習諸々の反省会を兼ねた休息だ。」

「トレーナーさん…それって…！」
「…おやおや。」
　トレーナールームに入った二人が真っ先に目にしたのは、普段のトレーナールームにはないもの。炬燵だった。
「…おう。こういうのはやっておいた方が良いと思ってな。入ってこい。」
「はぁ～い！失礼しますっ。」
　これまで口数が少なく、無愛想な印象しかなかった恐山。そんな彼の気遣いに二人は驚いたが、カイシンは外の寒さから逃げるように炬燵に飛び込んできた。ノイズサウンドもカイシンに遅れて炬燵に足を入れる。
「はぁぁ～…。外は寒かったから癒されるぅ～。」
「お前らの身体が第一だからな。出来ることはやるだけやるさ。」
「フッフッフ。私たちは良いトレーナーを持ちましたよねぇ。さてさて、炬燵を囲んでみかんをつまみながらこれまでの、そしてこれからの事を話しましょうか。」

「まずはノイズサウンド。お前はこの間のホープフルステークスはよくやった。」
「そうですね。見事なごぼう抜きでしたよねぇ。」
　最初の話題はノイズサウンドのジュニア期最後に走ったホープフルステークスの結果だった。ノイズサウンドは最初に最後方で様子を伺うように走り、それでいて取り残されないようピッタリとくっついて走って、最後の直線で急な加速でバ群を外から追い抜くレースをしたのだ。
「えぇ、ありがとうございます。ですが、この手は人気が高くなったら使えない手だと考えても良いでしょうね。」
「そうだな。お前は5番人気だったからな。」
「ですので、たまには差しの走りをしておいた方が良いでしょうね。追込はラストスパートでブロックされる可能性が高いですから。あ、失礼カイシン。みかん頂きます。」
「あぁ。今後はお前をマークするウマ娘とトレーナーが出てくる。そいつらにブロックされないような立ち回りと視野の広さを要求されるな。」
「ですが、私にとっては今回のクラシック戦線で注意すべきと判断したのはトウカイテイオーのみですね。」
「…やっぱりな。あのシンボリルドルフの無敗三冠を自分も取ると宣言したんだ。それに相応しい実力も持っている。マスコミ連中にとってはこれ以上ないネタだろうな。今頃、願掛けか書き初めで無敗三冠達成を決めているだろうな。」
「えぇ、目に浮かびますよ。張り切って新年の目標を口にしている彼女を…クックック…。」
　炬燵でみかんの皮を向きながらそんな会話をする二人。そんな二人を見るカイシンは何だか蚊帳の外にいるような気分になってきた。
「そう言えば、二人は神社で何を願ったんですか？」
　そこで、何気なしに話題を振ってみた。
「俺は、そうだな。お前らの無病息災だ。レースを走るウマ娘は怪我

と隣り合わせだ。お前ら二人が何事もなく走りきれるように神頼みをしていた。」
「トレーナーさん…！」
「おやおや、顔に似合わず優しいですねぇ。」
　最初に言ったのは恐山だった。トレーナーらしい願掛けにカイシンは感動し、ノイズサウンドは冷やかした。
「…そういうお前はどうだ？ノイズサウンド。」
　冷やかされたのが気に食わなかったのか恐山はノイズサウンドは何を願ったのか聞いてみた。
「そりゃあ、トウカイテイオーの無敗三冠の阻止ですよ。」
「そ、阻止!?」
「……。」
　ノイズサウンドはさらりと発言した。聞く人によっては喧嘩を売っているとしか思えない発言にカイシンは驚き、恐山はじっとノイズサウンドを見る。
「お前、それはマスコミの前で言うなよ？」
「クックック…。ええ、勿論。マスコミの前ではクラシックＧ１を獲ると言いますとも。ですが、悪役路線で行こうかと思いましてね。」
　恐山に注意されたノイズサウンドは分かっていると言わんばかりに不気味な含み笑いをする。
（やれやれ…。今年のクラシックは荒れるかもな…。）
　恐山は天井を仰ぎ見ながら今年のレースの行方を予見していた。

「あの、わたしは聞かないのですかぁ？」
「カイシンは口に出していたからな。」
「ええ、ですから聞く必要はないかと。」
「ひどいですよぉ…。」

雑音、勝負服に袖を通す

「コモーちゃん！勝負服が届いたんだって？」
「うふふっ。そうなんです！私だけの勝負服がぁ…来ちゃいました！」
「わぁーっ、どんなの？見せてよ！」
「ダーメ！皐月賞まで見せてあげなーい！」
「えぇー、いいじゃん教えてよー！」
皐月賞が迫る中、コモーノーデスはクラスメイトたちに得意気に自分に勝負服が届いた話で盛り上がっている。
その集団をポツンといるような位置で眺めているのはノイズサウンドとその友人、ライスシャワーだ。
「勝負服…。いいなぁ、ライスも早く走りたいなぁ。」
チヤホヤされているコモーノーデスの話題を耳にしたライスシャワーはそうぼやく。
「…ふむ、ライスシャワーさんはもし、勝負服を仕立てて貰うなら、どのような勝負服にしてほしいのですかな？」
ライスシャワーの独り言を拾ったノイズサウンドはなんとなく聞いてみた。まさか振られるとは思っていなかったライスシャワーは驚きながらも照れ臭そうに話す。
「え、えへへ…。ライスはね、ライスが好きな青いバラのおとぎ話をモチーフにしてほしいなって…。」
「ふむ…。あのお話ですか…。」
勝負服。
それはターフを駆けるウマ娘にとっては重要な服装だ。主にＧ１などの大きな舞台で着て走り、ウィニングライブをする。言わば唯一無二のユニフォームである。それ以外で袖を通すことがあるとするならば、着心地確認と採寸合わせか、記者会見に赴く際の正装である。
「ノイズサウンドさんも今年のクラシックを走るんだよね。どんな服なのかな？」
ライスシャワーはお返しにノイズサウンドの勝負服はどうなのか

聞いてみた。
「ふむ、実は今日届く予定でして。今日の授業を終えたら行くつもりですよ。」
「わぁっ…！ノイズサウンドさんの勝負服、楽しみだな。」
「クックック。ええ、ええ。期待しておいてくださいな。」
楽しそうに話す二人。その様子をコモーノーデスは一瞬チラリと一瞥したのだった。

勝負服を試着するためトレーナールームへと向かうノイズサウンド。しかし、途中でその足を止めた。
「アンタさぁ、Ｇ１の舞台は相応しくないのよ。いい加減自覚したら？どうせアンタの勝負服は田舎のダートくらいがお似合いの服よ。」
何故ならその進行方向にコモーノーデスが待ち構えていたからだ。
「無様さらす前にローカルシリーズに行った方が身の為じゃない？どうせアンタはトウカイテイオーさんの影も踏めない雑草ウマ娘なのよ。」
コモーノーデスはノイズサウンドをバカにするように貶す。
しかし、ノイズサウンドは何も言わずにコモーノーデスの横を通り過ぎようとした。
「あーっと、ごめーん。」
すると、コモーノーデスは側に来たノイズサウンドの足に自分の足を引っ掛けた。バランスを崩したノイズサウンドは地面に手を付き、受け身を取る。
「あれあれ～？偶然足が引っ掛かっただけで転ぶなんて。そんなバランスが不安定なウマ娘に皐月賞とか走れないでしょ？」
クラシックに入ってから、コモーノーデスはノイズサウンドに対し、誰も見ていない時に限り、陰湿ないじめをするようになってきていた。今のように足を引っ掛け言葉で貶すだけではない。上履きに画ビョウが入っていたことがあったし、偶然を装い身体をぶつけて来

ることもあった。その度にライスシャワーに心配されていたが、それはまた別の話である。
　しかし、ノイズサウンドはいくら言葉で責められようが、肉体に暴力を振るわれようが、無視をする。まるでコモーノーデスなど眼中にないと言わんばかりに、何事も無かったかのように無視をしていく。
「…チッ。いい加減気付きな。今年のクラシックはアンタなんかが勝っても誰も喜ばないんだよ。」
「……。」
　コモーノーデスは更に言葉責めをしていくが、ノイズサウンドには響いていないようで何事も無かったかのように立ち上がり、トレーナールームへと歩いていく。
「…ふん、なら好きにすれば？大負けして笑われる事は決まってるしね。」
　コモーノーデスはその背中に言葉を投げるが、ノイズサウンドは気にした風もなく歩いていった。

「やぁ、トレーナーさん。遅れましたか？」
　ノイズサウンドがトレーナールームに入ると、恐山とカイシン。いつもの二人がいた。
「いや、それほど待ってないぞ。」
「ノイズさん！ノイズさんの勝負服が来たんですよぉ～！」
　いつもの仏頂面の恐山と興奮気味のカイシン。二人を一瞥して机の上にある衣装に視線を向けた。
「さて、これから着てみますか。お二方は外で待っていただきませんか？」
「おう。」
「はぁ～い。」
　ノイズサウンドの頼みを聞いた二人はそそくさと出ていき、一人残ったノイズサウンドは自分の勝負服に手を伸ばした。
『どうせアンタの勝負服は田舎のダートくらいがお似合いの服でしょ。』

「…さて。」
頭に残った声を無視しながら、ノイズサウンドは意を決したよう、衣装に手を取った。

「着ましたよ。お二方。」
部屋の外で待っていた二人はノイズサウンドの声を聞いて動いた。真っ先に動いたカイシンはドアを開けた。
「うわぁ～…！」
「…ほう。」
カイシンは勝負服を着たノイズサウンドの姿を見て感嘆の声をあげた。恐山もカイシンに続いてトレーナールームに入りノイズサウンドの勝負服を見て声を漏らした。
その衣装は赤と黒に彩られた燕尾服のような衣装だ。黒に近い赤色にノイズサウンドのすらりと伸びた体躯、そして不気味な笑顔も相まってその姿は悪魔のようであった。
「カッコいいですよぉ！」
「良いじゃないか。お前はどうなんだ？」
二人の感想を聞いたノイズサウンドは改めてトレーナールームに備え付けられている姿見に目を移した。
赤黒い色で禍々しさすら感じる勝負服姿。
この衣装でターフを駆けると思うとノイズサウンドは口角を上げるのを抑えられない。
「そうですねぇ…。特に動きづらさは感じない、そして私らしさがよく現れていると思いますよ。」
「よぉ～し！わたしは今年こそ！デビュー出来るようになって勝負服を貰います！そして、ノイズさんに追い付けるようになるんだ！」
「なら、カイシンはこの後トレーニングだな。先に練習場に行っておけ。」
恐山に指示されたカイシンは元気よく返事をするとトレーナー

ルームを出ていった。
「…これで、私の戦いが始まりましたね。」
「あぁ。そうだな。」
ノイズサウンドの呟きに恐山は同意するよう呟いたのだった。

雑音、皐月賞出走

「ではこれより、皐月賞出走者のインタビューを始めます。」
学園にあるインタビュー室。そこには大勢の記者と勝負服を見に纏った出走するウマ娘、そして進行を進める司会がいた。
皐月賞が一週間前に迫った時期にインタビューを行って世間にアピールする場である。
「ではまずは…」
一人一人、出走者の意気込みが語られる中、ノイズサウンドは落ち着いた様子で佇む。
「では次に、トウカイテイオーさん。意気込みをどうぞ！」
「ボクの目標はズバリ！カイチョーと同じ無敗三冠だよ！だからこの皐月賞は絶対負けられないね！」
（クックック…。やはり、このトウカイテイオーは他の出走するウマ娘とは違う…。）
トウカイテイオーの意気込みを聞いた記者はやはり、無敗三冠を目指し、それに相応しい実力を持つウマ娘には釘付けになる。ノイズサウンドは今にも笑いだしそうだが、何とかこらえることが出来た。
「では次に、コモーノーデスさん、意気込みをどうぞ。」
「あ、は、はい。あ、あのー、さ、皐月賞に、出れるなら、一着取りたいと思ってます。はい。」
ノイズサウンドはコモーノーデスの次である。コモーノーデスの意気込みをバ耳東風に聞き流したノイズサウンドは心の中で一息つく。
「では、最後にノイズサウンドさん。意気込みをどうぞ。」
「クックック…。そうですね。このクラシックＧ１の初戦という重要な舞台に出られるならば…。現在の一番人気に勝つ気でいますよ。」
ノイズサウンドの宣戦布告と捉えられる発言に、トウカイテイオーは青い目をパチクリし、記者はどよめき始めた。
「へぇー…。そこまで言うなら、受けて立とうじゃないか！ノイズサウンド！」

だが、トウカイテイオーは闘志を漲らせる青の瞳でノイズサウンドを捉え、その様子を見ていた記者たちはペンを走らせ始めた。
その翌日の新聞の一面には、
『ノイズサウンド、トウカイテイオーに宣戦布告！無敗三冠を阻むか!?』
と、出ていたのだった。

皐月賞当日。
「あの皇帝シンボリルドルフ以降の無敗三冠が出てくるかもしれないんだろ？」
「いやー、楽しみだなー！」
「でも、ルドルフには絶対があったけど、トウカイテイオーはどうなんだろな？」
「そうだよなぁ。あのノイズサウンドってウマ娘…ただもんじゃないって感じだよな。」
「今年のクラシックはやべぇかもなぁ～！」
スタンドの観客たちはレースが始まるまでの間、口々に出走するウマ娘たちの情報にコメントし、誰が勝つか予想しあっていた。当日の一番人気はトウカイテイオー。そして、前は八番人気だったノイズサウンドは四番人気までに上がっていたのだ。

「うわわわ…。遂に皐月賞だ…。」
「貴女は出ないでしょう？何をそんなに震えているんですか…。」
皐月賞の選手控え室。カイシンは緊張で震えており、勝負服を見に纏ったノイズサウンドに呆れられていた。
「だ、だって、今、目の前にいるノイズサウンドさんがこれからクラシックのＧ１戦線走るんだと思ったら…。」
「貴女も将来走ることになるかも知れないんですよ？観客席にいるだ

けで緊張するようでは先が思いやられますね。」
「そうじゃない。確かにお前がG1走ることもあるが、カイシンはお前があの記者会見で放った発言でパニクっている。」
恐山はカイシンの緊張の理由を話す。八番人気が一番人気に宣戦布告をする。記者会見から数日はその話題で持ちきりになり、様々な憶測が飛び交っていたのだ。カイシンはトウカイテイオーとクラスメイトな上にノイズサウンドと同じトレーナーだったため、他のクラスメイトに問い詰められたのだ。
「一体、何であんなこと言ったんですか？いい加減教えてくださいよ！大変だったんですから！」
「別に。皐月賞を盛り上げようと思っただけですよ。」
「もーっ!!絶対そんなんじゃないですよ!!」
はぐらかし続けるノイズサウンドにカイシンは頬を膨らました。だが、ノイズサウンドはその膨らんだ頬に人差し指でつつく。カイシンの口からプス～っと頬に貯まった空気が漏れ出ていく。
「本当に何でもないですよ。実際、私はお咎め無しで皐月賞に問題なく出ているではないですか。」
「そ、それは、そうですけど…。」
カイシンは納得していないが、一応は引き下がってくれた。
すると、ノックの音が聞こえた。パドックでアピールをし、出走準備する段階に来たのだ。
「さて、そろそろ向かいますか。」
ノイズサウンドは椅子から立ち上がるとパドックへと向かっていく。しかし、カイシンはパドックへ向かうノイズサウンドの背を心配そうにじっと見つめていた。
「おい、俺達はスタンドへ行くぞ。」
「はい…。」
恐山に呼ばれ、カイシンは後ろ髪を引かれる気持ちで観客席へと向かっていった。

『七番人気、六番、コモーノーデス。』
パドックでは、皐月賞の出走者達が勝負服を観客に披露しており、その度に拍手が起こる。
コモーノーデスも自身の勝負服を身に包んで観客に思い切り可愛らしいアピールをする。しかし、その笑顔とは裏腹に心の中は荒れていた。
(何でよ…!何であんな奴がアタシよりも人気が上なのよ!?不平等じゃないの!どうせ大口叩いてるだけ…。そうよ!目立ちたいあまりに大口叩いているだけなのよ!あんな奴とは違うんだから!!)
コモーノーデスはノイズサウンドの印象を薄くしようと観客に存分アピールをした後、ノイズサウンドを呼ぶアナウンスが流れた。
『四番人気、七番、ノイズサウンド。』
アナウンスが流れた後にカツン、カツン。と一歩一歩を踏み締めるように歩く音が聞こえ、ノイズサウンドが現れた。
「うぉぉ…。」
「やっぱ生で見ると違うな…。」
「この雰囲気で四番人気?二番人気の間違いじゃないのか?」
「まるで悪魔だな…。」
赤黒い燕尾服のような勝負服。何を考えているのか読み取りづらい仮面のような笑顔。そして、すらりと伸びた体躯に幽鬼のようで、隙がない佇まい。
観客たちはパドック現れたノイズサウンドの雰囲気に息を飲んだ。
(…ふん!精々カッコつけてるが良いわ。今回の皐月賞でアンタの薄気味悪い笑顔のメッキは剥がれるんだからね。)
完全に注目を奪われたコモーノーデスは唇の下で歯軋りをして負け惜しみをするしかなかった。

(ノイズサウンド…か…。)
指定の観客席からパドックを見ているシンボリルドルフはノイズ

サウンドを見て、目を細め、スカウト前にやった模擬レースを思い出していた。
（あの走り…。本来の脚質ではない、トレーナーも居ない状態だったが、それでも気を抜けない走り方をしていた…。もし、あの時仕掛けるタイミングが間違えていたら追い越せなかったかもしれない…。さて、トレーナーを得てこの皐月賞でどう化けたか、見物だな。）
『一番人気、十八番、トウカイテイオー。』
アナウンスが最後にトウカイテイオーの名を呼んだ瞬間、歓声が上がった。パドックに立っていたウマ娘はノイズサウンドを除き、少し驚いたようにビックリする。
しかし、トウカイテイオーは自身に向けられた歓声に臆すること無く軽やかなステップを踏みながらパドックに現れた。
「うぉぉぉぉ！テイオー頑張れー！！」
「俺達に三冠の夢を見させてくれー！」
「キャーッ！可愛い～！」
本命の一番人気の登場で観客のボルテージは更に上がる。
（…期待してるぞ、テイオー。今年はノイズサウンドという魔物が虎視眈々とお前を狙ってる。お前がどう走るのか見て貰おう。）
シンボリルドルフは微笑みながら、トウカイテイオーに心の中で激を送り、パドックで不敵な笑みを浮かべるノイズサウンドを睨むように見つめるのだった。

「わあ、ここがG1の…すごいですね！」
カイシンは最前列の席で目の前に広がるターフに目を奪われていた。
「来年、お前もここを走る事になるかもしれないからな。しっかり場

の空気、雰囲気、そして走るウマ娘達を焼き付けとけ。」
　恐山はその隣でカイシンにアドバイスをする。モチベーション維持のためならばやっておいて損はないだろう。
「…おや？やぁやぁ、これはこれは！」
　すると、隣からやけに馴れ馴れしい声が飛び込んできた。ターフに夢中になっているカイシンに代わり恐山が目を向けると、
「恐山トレーナーではないか！そう言えば、キミのウマ娘も出走するんだったね！」
　釜瀬トレーナーだった。大声でキザったらしい態度は相変わらずのようで恐山の強面に臆すること無く距離を詰めていく。
「ふふん。今日の皐月賞、残念ながらトウカイテイオーでも、キミのノイズサウンドでもない！ボクの可憐でもあり、強くもあるコモーノーデスがかっさらってやるさ！パドックの注目はキミのノイズサウンドとトウカイテイオーに奪われたが、コモーの魅力は…」
（さて、ノイズサウンド。お前の末脚がこのＧ１に通用するか…。）
　釜瀬の担当ウマ娘のプレゼンを聞き流しながら恐山はスタートのゲートに注視するのだった。

『ここを制しなければ三冠の栄光は掴めません。皐月賞、中山、稍重の芝２０００ｍに十八人のウマ娘が揃いました！一番人気はトウカイテイオー。あの皇帝シンボリルドルフに憧れてターフに立ち、ここまで無敗。だが重賞は初挑戦です。宣戦布告をしたノイズサウンドはホープフルステークスを制したジュニア王者。果たして、勝つのはどのウマ娘でしょうか？』
　実況が流れるなか、ゲート前に立つウマ娘達。
　勝利しか考えていないウマ娘達の異様な雰囲気にノイズサウンドはウズウズしていた。
（これが…クラシックＧ１…。）
　噛み締めるように、目を閉じて五感を働かせるノイズサウンド。同期のプレッシャーに極悪な笑みを浮かべ、足踏みする。

「ねぇ、ちょっと。」
すると、声を掛けられた。
まだ場の雰囲気を味わっていたかったノイズサウンドは渋々ながら目を開け、声を掛けてきた人物に視線を動かした。
「でしゃばった真似すんじゃないわよ。親知らず。」
声を掛けてきたのはコモーノーデスだった。それが分かったノイズサウンドは無視するようにまた目を閉じた。
「ちょっと！聞いて…」
その態度に怒りを覚えたコモーノーデスが噛みつこうとした瞬間、ラッパの演奏とそれに合わせた手拍子が起こった。
レース開始のファンファーレだ。これから出走するウマ娘達はゲートに入らなければいけない。
「チッ…、無様な敗けを期待してるわよ？」
コモーノーデスは舌打ちしながらゲートへと向かい、ノイズサウンドもゆっくりとゲートに入っていく。
（さぁ…トウカイテイオー、油断してはいけませんよ？）
（ここから始まるんだ…ボクの三冠への道が！）
（そうよ、人気が上だからってノイズサウンド風情にアタシが負けるわけないじゃん。あ、でもテイオーさんには一着譲ろっかなー？）
全員がゲートに入り、レース場は不気味な静けさに包まれる。そして、

ガコン!!

ゲートが開いたと同時に歓声が響き渡った。

『スタートしました！まず先頭でハナを主張したのはコモーノーデスです！ローカルシリーズから成り上がったウマ娘がハナを主張しました！このまま先頭をキープ出来るのでしょうか!?』

「行けー！トウカイテイオー！」
「ノイズさぁぁぁぁん！頑張れぇぇぇぇ!!」
「後方に位置しつつも、離されないようにしている…。理想の展開だな。」
「いいぞ！コモー！そのまま先頭を誰にも譲るな！」
スタートと同時にウマ娘は駆け出し、観客はそれぞれ好きなウマ娘に声援を送る。当然、見に来ているカイシンや恐山、釜瀬も例外ではない。このレースを見に来ている者全員が大いに盛り上がっていた。

「…うん？」
しかし、ターフ全体を俯瞰して見れる観客席でレースを見守っているシンボリルドルフは難しい顔をした。
視線の先にいるのはコモーノーデスだ。
「あら、どうしたの？」
隣で一緒にレースを見守るマルゼンスキーがシンボリルドルフの表情に気付き、話し掛ける。
「…マルゼンスキー。君の意見を聞かせてほしい。コモーノーデス君の走り、あれを見てどう思う？」
シンボリルドルフに促され、マルゼンスキーは先頭で走っているコモーノーデスを見る。すると、マルゼンスキーも難しい顔をした。
「うーん…こういうG1レースに出てる娘は一杯見てきたけど…あの娘、本気の逃げじゃないわね。」
「あぁ、策があるのか、それとも…。」
シンボリルドルフは無敗で三冠を獲り、G1七冠を制したウマ娘である。そんな彼女は生徒会の仕事のため、レースを退いた身ではあるものの、レースを読む目は衰えていない。そんな彼女の戦術眼が察したのだ。
コモーノーデスは最初から勝つつもりは無いのかと。

（へへへっ。この後トウカイテイオーさんが来たら、先頭を譲って、ノイズサウンドのクソ野郎に抜かされない程度に頑張れば…。）
　そんな目論見が皇帝にバレているとも知らないコモーノーデスは最終コーナーもそのままのペースで走り続ける。
『さぁ、最終コーナーを曲がって直線に入った！トウカイテイオー抜けた！抜け出した！コモーノーデスは伸びない！』
「コモー!?どうしたんだ!?まだ足は残っているんだろう!?」
　釜瀬トレーナーは悲鳴に近い困惑を口に出す。しかし、コモーノーデスはそんなトレーナーの心配をよそにほくそ笑みを浮かべる。
（よしよし、このまま入着出来るペースで走れば…。）
『ここで大外から赤い勝負服が飛び出してきた!!ノイズサウンド！ノイズサウンドだ!!先頭へ抜け出したトウカイテイオーを逃がさないと言わんばかりの凄まじい末脚だ!!驚異的な加速力!!』
（え？はぁっ!?何やってんのアイツ!?そのままトウカイテイオーさん勝たせなよ!?ってかアタシ抜かされてる!?）
　コモーノーデスは視界に入ってきた赤黒い影を見つけ、慌ててスパートを掛けた。しかし、既に遅かった。
「コ、コモー！そんなあ!?」
「ノイズさぁん！まだ行けまぁす！さっさと加速しろアホンダラ！」
「もっとだ！もっと伸びろノイズ!!」
　崩れ落ちる釜瀬を尻目に興奮したカイシンと恐山もエールを飛ばす。
『残り２００！コモーノーデス、ようやくスパートしたが伸びない！バ群の中に沈んでいく！ノイズサウンド追い掛ける！赤い悪魔が距離を詰めるがトウカイテイオー、抜かせない！トウカイテイオー強い！トウカイテイオー、一着でゴールイン!!堂々と駆け抜けましたトウカイテイオー!!』
　結果は、トウカイテイオーの勝利でノイズサウンドは半バ身差の二着だった。
「ま、負けちゃいましたぁ…へにゃあ～…。」

「…まぁ、結果は残せた。それだけでも十分だ。」
カイシンは別人格まで出てくるほど全力で応援したため力が抜けてその場にへたり込んでしまった。恐山も内心、地団駄を踏みたかったが、この結果をポジティブに捉える事にした。

(クソ…、負けましたか。仕掛けるタイミングが遅かったのが敗因か?)
ノイズサウンドは肩で息をしながら考察し、軽やかなステップで観客にアピールするウマ娘を見る。
トウカイテイオーは自信満々に人差し指を空高く突き出していた。
自分は一冠を手にいれたとアピールしたのだ。その後ろ姿は正しく、強者らしい自信に満ち溢れた姿だった。
(…まぁ、良いでしょう。まだチャンスは二回ある。それまでに仕上げなくては…。)
ノイズサウンドは開き直り、ウィニングライブの為にその場を後にした。
(何でよ…?何でアタシが入着してないわけ!?こんなのあり得ないでしょ!?…アイツだ!ノイズサウンド!アイツがペースを乱してきたせいでアタシは入着出来なかったんだ!!ふざけやがって…!)
コモーノーデスは掲示板を見て自分の番号が出ていない事をノイズサウンドのせいだと逆恨みし、ノイズサウンドの姿を血眼になって探した。だが、ノイズサウンドは既にウィニングライブの準備に向かっていたのだった。

「…明日、コモーノーデス君と話してみよう。」
シンボリルドルフは最終コーナーを曲がった辺りでコモーノーデスがスパートを掛けなかった事でトウカイテイオーに忖度しているのが確信した。
トウカイテイオーの勝利を見た時の穏やかな顔から一転、皇帝の顔に変わる。それも見たマルゼンスキーはそれとなく宥めた。

「あんまり脅しすぎちゃダメよ？」
「…それは、コモーノーデス君の弁解次第だろうな。」
「…そうね。でも今は、テイオーちゃんのライブを見届けましょう？」
「…あぁ、そうだな。」
シンボリルドルフはトウカイテイオーのウィニングライブを見届ける為に、全ウマ娘の幸福を願う生徒会長の顔になったのだった。

雑音、庇われる

皐月賞を二着という結果で収めたノイズサウンド。
世間の評価では出走前の記者会見、そして皐月賞の結果から『帝王の無敗三冠伝説を阻む悪魔』『無敗三冠の偉業に走る雑音』とトウカイテイオーのライバルではあるが、悪役的な扱いとなっていた。しかし、ノイズサウンド本人としては狙ってやったことなので別段気にしなかった。
皐月賞を走った次の日は学校もトレーニングも休みで、ノイズサウンドは暇でしょうがなかった。
（…やはり、ここのスパートのタイミングが少し遅れているように見えますね。もう少しタイミングが早かったら完全に抜け出せましたが…日本ダービーはもう少し作戦を練ってみますか。）
ノイズサウンドは一人しかいない寮の自室で暇をもて余しており、皐月賞の動画を見返して一人反省会をしていた。が、それでも暇の方が勝っており大きなあくびをする。
（むぅ…こういうときは、図書室で息抜き兼情報収集ですかね…。）
ノイズサウンドは自身のスマホから目を離すと、東京レース場の情報を得るために腰を上げた。

寮から出たノイズサウンドは図書室へ向かうべく歩みを進めていると進む先にウマ娘が道を塞いできた。
「ねぇ。ちょっと面貸しなよ、空気読まず。」
現れたウマ娘はコモーノーデスだった。怒りを隠そうとしてない声でノイズサウンドに詰め寄り制服の襟首を掴んで引っ張る。
「いえ、私はこれから…」
「つべこべ言ってんじゃないわよ！さっさと来い！」
ノイズサウンドは断ろうとしたが、コモーノーデスは有無を言わず、ノイズサウンドを乱暴に引っ張って人目の無い場所へ行った。
「あれって…！」

その現場を見た者がいたことに気付かずに。

「あんたさぁ！何で！ふざけたことすんのよ!?」

コモーノーデスは怒りに任せてノイズサウンドの服の襟を掴み、壁に何度も叩き付けた。しかし、ノイズサウンドはやり返さない。

「トウカイテイオーさんの夢を潰すつもりなの!?あんなレースなんかして！悪いと思わないの!?トウカイテイオーさんを勝たせてあげようって考えはないわけ!?」

それでも感情のまま叫び喚くコモーノーデス。すると、何度も壁に叩き付けられたノイズサウンドはついに笑顔の仮面を崩してしまった。

だが、仮面が外れたノイズサウンドの顔を見たコモーノーデスは思わず罵倒を止めたのだ。

何故なら、いつもの怪しい笑顔から一転、ノイズサウンドはコモーノーデスに対して侮蔑と怒りと失望を含んだ視線で睨み返したからだ。

「な、何よ？何か文句でもあるの？」

「…その発言。トウカイテイオーの前で言うなよ、小物。」

「は、はぁ？あ、アンタがアタシに何か文句言う権利あると思ってんの？」

ノイズサウンドはドスを効かせた声でコモーノーデスを脅す。コモーノーデスは言い返されるとは思っていなかった。ノイズサウンドの口から出た、声に動揺する。

「えぇ、ありますとも。私はレースするウマ娘ですからね。その発言はトウカイテイオーのみならず、皐月賞を走ったウマ娘全員に対する侮蔑だと思ってください。」

ノイズサウンドはその隙を逃さず、コモーノーデスに壁に押さえつけられているにも関わらず忠告をした。だが、ノイズサウンドを下に見ているコモーノーデスには逆効果のようだ。

「うっ…。な、何よ…！だったら走れない体にしてやるわよ!?」

コモーノーデスは頭に血が昇るあまりノイズサウンドの足を蹴ろうとした。
しかし、黒い影がコモーノーデスの足に飛び付きしがみついて止めたのだ。
「だ、ダメです…！ライスのお友達に、ひどいことしないで！」
「な、何よ!?」
「貴女は…！」
しがみついて来た黒い影の正体は、ノイズサウンドの親友ライスシャワーだった。まさかクラスメイトに見られていたとは。コモーノーデスは慌てて表向きの顔でライスシャワーに対応する。
「は、放してくれないかなー？ライスシャワーちゃん？」
「嫌です！ノイズサウンドさんに乱暴しているのライス見ちゃったもん！だからノイズサウンドさんにひどいことしないってライスと約束して！」
「…ライスシャワーさん、別に庇わなくても良いですよ。私は気にしていませんし、ライスシャワーさんを巻き込む訳には…」
「でも！お友達がいじめられてるのに何もしない方がもっと嫌なんです!!だってライスは、みんなを幸せにしたくて、ここに来たんだから…！」
ノイズサウンドが突き放そうとするも、ライスシャワーは頑としてコモーノーデスの足から離れない。ノイズサウンドは眉を曲げて困ったと言いたげな表情になり、頭を掻く。
「はぁ～…、そう。コイツに随分と絆されてるじゃん。それじゃあ、目を覚ましてあげようか…。」
ライスシャワーの叫びを聞いたコモーノーデスは声を低く落とし、完全に表向きの仮面を外した。コモーノーデスが何をするのかノイズサウンドは察した。
「コモーノーデス。ライスシャワーさんは関係ないですよ。標的にするなら私一人にしてください。」
ノイズサウンドは引き留めるように、それでいて声を荒げない程度の声でライスシャワーを庇った。

今まで声の圧を変えることがなかった友人の姿にライスシャワーは紫色の瞳を大きく開く。そして、その声を聞いたコモーノーデスは良いオモチャを見つけたと言わんばかりの表情をした。
「…へぇー、庇うんだ？こんなちっこくてまだデビューもしてないし、レースに向いてなさそうな奴をアンタが？」
ノイズサウンドはそれまで崩さずにいた笑顔に少しだけ下唇を噛み、コモーノーデスを睨む。
「そうだな～。じゃあ、これからアンタはアタシの舎弟になりな。土下座をして『今まで舐めた態度をしてすみませんでした。これからあなたの下僕でいます。』って、言ったら許してやろうかな～？」
「そ、そんなひどいこと…！」
「…それで許されるなら、安いものですよ。」
「ノイズサウンドさん!?」
コモーノーデスの屈辱的な提案にノイズサウンドはあっさりと受け入れた。ライスシャワーは泣きそうな目で友人を見るが、ノイズサウンドは笑った。まるで、心配するような事じゃないと。そう言いたげな目で。
（ダメだよ…。ノイズサウンドさん！ライスのためにそんな事しなくても…！）
「ほら、早く言いなよ。アンタは…」
「うぉらあああああああっ!!フラストレーションが押さえられねぇぜぇぇぇぇぇぇ!!」
「ふぇっ!?」
「へ!?」
「なっ…!?」
すると、突然大声が響き渡り三人は驚愕の表情を浮かべた。
いや、一人は絶望した顔になった。
「おらおらおらあああ!!お？よう紅ショウガ！何だそれ、大喜利でもやるのか!?邪魔だてめー！」
「ぐえっ!?」
現れたのはゴールドシップだった。トレセン学園指定のジャージ

を着ていることからトレーニング中だったのだろうか。コモーノーデスを突き飛ばして、土下座姿勢のノイズサウンドの前に立つ。
「いやー、お前はヴィジュアルバンドやるかと思ったらまさか落語家になりたかったなんてな！ゴルシちゃんビックリしたぜ！そんな驚いてもねぇけど。田中くん！ノイズサウンドの座布団全部持ってって～！」
（屈辱だ…。よりにもよってコイツにこの姿を見られるのは…。）
　ゴールドシップはベラベラと喋りまくるが、今のノイズサウンドには対応するだけの余裕もなく、ずっと地面に顔を向けたままだ。
「つーか、聞こえてんの？もしもし？もしもぉ～し？」
「あ、あの、ゴールドシップ、さん…？」
　突如現れたゴールドシップにライスシャワーは困惑する。友人をいじめていたウマ娘が突然妙なことばかり口走るウマ娘に突き飛ばされたのだから無理もない。
「トゥルルルルン、トゥルルルルン。ガチャン。お電話ありがとうございます。こちら、ゴルシちゃん何でも相談センターです♪あなたのお悩みはなんでしょうか？良かったらお聞かせくださーい♪」
（早く何処かに行ってください…。）
　ノイズサウンドの反応が無いことを不思議に思ったゴールドシップは更に絡んでいく。鬱陶しく感じたノイズサウンドは地面に顔を向けたままやつれた顔になった。
「あ、あのぉ～ゴールドシップさぁん…わたしの心配はぁ…。」
　すると、突き飛ばされたコモーノーデスが戻ってきた。話し掛けられたゴールドシップは声がした方に目を向け、ノイズサウンドはこのままコモーノーデスに意識が向いていてほしいと願うばかりだ。
「んん？おっ。おぉーっ！お前は確か！」
　自分の事を知っているのか声を上げたゴールドシップにコモーノーデスは得意気になったが、
「昨日の皐月賞で忖度丸出しのクッソつまんねぇ逃げをしていた奴じゃねーか！えーっと、コモノデスヨだったな！」
　昨日のレースの忖度を見抜かれていた上に名前も間違われた。コ

モーノーデスの得意気な笑顔が引きつる。
「こ、コモーノーデス、ですよ？ゴールドシップ先輩？」
「そうカリカリすんなよ。んな細かいこと、どうだって良いだろ。つかさぁ、なんかお前ムカつくから蹴っ飛ばしたくなるんだよなぁ。していいか？」
「名前は細かくないですよ！て言うか怖い!?暴力反対です！」
「にしてもよぉ、マジでどうした紅ショウガ？さっきからイソギンチャクレベルで動かねぇじゃねーか。キャベツ食ったバフンウニでもつまみ食いしたか？」
「わたしの事は!?」
　すぐにコモーノーデスに興味を失くすゴールドシップ。場のペースは完全に葦毛の奇人の物になっていた。
「まぁ、良いや。お前の日本ダービー応援してっぞ～。じゃなー。」
　ゴールドシップは言うだけ言い、その場を後にした。残された三人の内一人は安堵し、二人はポカンとするしかなかった。
　最初に動いたのは暴力予告をされたコモーノーデスだった。
「と、とりあえず！ノイズサウンド！アンタはこれからアタシとレースに出たらアタシより下の順位になりなさい！分かったわ…」
　コモーノーデスがゴールドシップからノイズサウンドに向き直り、仕切り直そうとした。
「ダメです…！ノイズサウンドさんは、いじめさせません！」
　しかし、土下座をしているノイズサウンドを庇うようにライスシャワーが耳を後ろに向け、小さな身体を大きく見せるように両手を広げていた。
　勿論、体格でいうとコモーノーデスの方が有利だ。軽く押せば呆気なく倒せるだろう。だが、コモーノーデスには出来なかった。
（な、何よコイツ…！いっつもおどおどして、小さいくせに、なんて目をしてんの!?）
　ライスシャワーの我が身がどうなろうと友人を守る。そう決意したような目がコモーノーデスを食い殺さんばかりの目で睨んでいたのだ。

下手に刺激すると喰われる。
コモーノーデスの矮小な心はそう叫んでいた。
「あー、もう！きょ、今日は見逃してやるわ！運が良かったわね!?でも言っとくわよライスシャワー!!このクズの味方になるならアタシにも考えがあるからね!!それまで仲良しごっこしておくんだね！」
コモーノーデスは明らかに恐怖の感情が出ている耳を垂れさせながら逃げ去るようにその場を後にした。
脅威が去って行き、背後にいる友人を庇ったライスシャワーは振り向いた。
「ノイズサウンドさん！大丈夫ですか？」
ライスシャワーが安否を確認すると、ノイズサウンドはポカンとした表情になっていた。
「ノイズサウンドさん？あわわ…どうしよう？」
頭の打ち所が悪かったのだろうか？そんな不安がよぎり、ライスシャワーは慌て始める。
「保健室で診て貰った方がいいのかな？でも、どう説明すれば…」
「失礼、ライスシャワーさん。」
そんなパニックに陥ってるライスシャワーの顎をノイズサウンドはくいっと持ち、顔を近付けて来た。それはまるで寮長フジキセキがよく違反をした寮生に注意するような仕草だ。
「へっ？へっ！ふぇっ!?」
ライスシャワーは脳がオーバーヒートを起こしそうな状況に続き、驚くことしか出来ない。
（…気のせいでしょうか？さっきの、小物から私を庇った時のライスシャワーさんの威圧感…。ふむ…。）
「あ、あにょ…ノイズサウンドさん…近いです…。」
「おぉ、失敬。少し驚かせてしまいましたか。私なら大丈夫ですよ。…ライスシャワーさん？」
「ふ、ふわぁ…。」
ノイズサウンドは先程のライスシャワーが何なのか考えていたが、絞り出すように出たライスシャワーの声で慌てて離れ、頭から煙が出

ているライスシャワーが落ち着くまで対応するのだった。
「しかし、困ったことになりましたねぇ…。私はこの学園で問題児と呼ばれ、世間の評価も悪役的な面が目立つのに、貴女を巻き込むつもりは無かったのですが…。」
「う、ううん。ライス、お友達を助けたかったから、気にしないで？それに、ノイズサウンドさんはそんなに悪い人じゃないって、ライス知ってるから。」
　ようやく落ち着いたライスシャワーはノイズサウンドに心配ないと笑い掛ける。その姿を見たノイズサウンドはライスシャワーの評価を改めた。
（ライスシャワー…。これまで臆病なウマ娘だと思っておりましたが、自分よりも格上の相手を睨み怯ませる威圧、我が身よりも友人を優先する精神力…。いやはや中々素晴らしい素質をお持ちじゃないですか。）
「ノイズサウンドさん？どうしたの？」
　自分を見て笑みを浮かべるノイズサウンドを不思議に思ったライスシャワーは首を傾げる。
　ノイズサウンドは直ぐ様ライスシャワーの手を取った。
「ライスシャワーさん。」
「は、はい。」
「トレーナーは？」
「ま、まだ、いませんよ？」
「では、少し来てほしい場所があるんです、私の為と思うなら着いてきてください。」
「は、はい？」
　ノイズサウンドはライスシャワーの同意を強引に取ると恐山のトレーナールームへと引っ張って行ったのだった。

　ノイズサウンドがライスシャワーを連れていく数分前、コモーノー

デスは苛立ちを隠そうとせず、独り言を言いながら早歩きで歩いていた。
「クソ、クソっ！何なのよ、あのライスシャワーとか言うチビ！このアタシにあんな反抗的な目をするならこっちだって考えがあるのよ！」
「ほう、それはどんな考えだ？」
独り言を聞かれた。コモーノーデスは慌てて猫を被って声がしたほうを見る。そのまま可愛く「じょーだんです♪テヘッ☆ミ」と言おうとしたが、声を掛けた人物を見て固まってしまった。
「何やら随分と不機嫌な様子で気後れするが、少しばかり生徒会室に来てくれないかな？コモーノーデス君。」
何故なら、声を掛けた人物は皇帝の通り名で知られる生徒会長、シンボリルドルフだったからだ。

小物、玉砕する。

（ヤバいとこ見られちゃったでもまだ言い訳すればやり過ごせると思うし上手く行けばアタシのことを気に入ってくれてあのクソ野郎をトレセン学園から追い出せるかもしれないから頑張ろうよし頑張ろう慌てない慌てないあわわわわ）

シンボリルドルフに生徒会室へ招かれたコモーノーデス。

震える自分とその対面に生徒会室の奥にある会長の座席に座るシンボリルドルフ。隣には副会長である女帝エアグルーヴを控えている。その姿は正しく皇帝に相応しい威厳があり、場の空気を張り詰めていたのだ。

「急な呼び出しをして申し訳無いな、コモーノーデス君。君には幾つか聞いておきたいことがあるんだ。」

カリスマ性溢れる声でコモーノーデスに話し掛けるシンボリルドルフ。だが、その声色は普段生徒であるウマ娘の幸福を願う優しい生徒会長の声ではなく、皇帝の名に相応しい威厳とプレッシャーを与える程の気迫を感じられた。守る盾もなく、無防備に晒されたコモーノーデスは滝のような汗を吹き出し、気を失いそうになった。が、媚を売ればどうとでもなると思い、できる限りの笑顔で返事をした。

「は、はい！それにしても、わたしの名前をご存知だと言うことは、もしかして私って、会長さんに注目されてるんですか？」

「ふふっ。自慢じゃないが、私はこのトレセン学園にいる全生徒の顔は皆記憶しているのだよ。新入生、転入生、分け隔てなくね。」

「す、すごいですぅ～！尊敬しちゃいます！（チッ！アタシはノイズサウンドと同じ扱いってワケか？）」

コモーノーデスは笑顔の下で吐き捨てる。だが、このままノイズサウンドの悪評を生徒会に植え付ければと悪巧みをして、口を開こうとしたがそれを制するようにシンボリルドルフが話し掛けてきた。

「さて、まずは昨日の皐月賞についてだ。私はマルゼンスキーと一緒に直接見に来ていたのだが、スタートから第一コーナーにかけて君の走りに違和感を感じた。そして、最後の直線では私の予想通りスパー

トを掛けなかった。コモーノーデス君、単刀直入に言うよ。もしかして君は忖度をしていたのか？」
　シンボリルドルフが問い掛けてきたのは昨日のレースについてだった。自分の浅はかな考えが見透かされている。コモーノーデスはノイズサウンドの出任せの悪評を言おうとした言葉が喉の奥に引っ込ませられ、心臓を鷲掴みにされた気分になった。
「え、えー？わ、わたしは、昨日のレースはぁ、真面目に走りましたよぉ？た、ただぁ、そのぉ、その…そう！あの日は稍重だったじゃないですか！だからいつもの調子が出なかったと言うか、重バ場のトレーニングはしていなかったのでスパートを掛けるタイミングが分からなかったのですよ！」
　それでもコモーノーデスは何とか猫を被った笑顔と態度を保ち、汗だくながらシンボリルドルフの問いに対応した。が、それでも皇帝の鋭い眼差しは弱まらない。すると、隣に控えていた副会長のエアグルーヴが話し掛けてきた。
「…つまりお前は、こう言いたいのか？会長の目は節穴だと。」
「へぇっ!?そ、そそ、そんな滅相もない！クラシックのＧ１ですよ？そんな忖度なんか出来るわけ無いじゃないですか！エアグルーヴさん！」
「お前のトレーナーに、どのようなトレーニングをしているか聞いたのだが、良バ場でも重バ場でも対応出来るようなトレーニングはしていたと言っていた。お前もそれに応えるように真面目にトレーニングをしていたと証言しているが？」
　エアグルーヴがコモーノーデスの言い訳に差し込む。女帝に相応しい眼光がコモーノーデスに突き刺さる。
「う…。と、トレーニングの時は調子が良かったと言うか…そう！前日になって片頭痛起こっちゃって！」
「本当か？お前のトレーナーはレース前、特に調子を崩した様子もなかったとも言っていたぞ？」
　コモーノーデスの言い訳をエアグルーヴは更に逃げ道を塞ぐ。
「う…あ…。あのぉ～、その、て、テイオーさんが強かったから勝つ気

が削がれちゃって…」
「最後の直線でテイオーに差された君の顔は随分と余裕そうに見えたが？」
　トウカイテイオーを言い訳の道具に使った瞬間、シンボリルドルフの一声で場の空気が一気に薄くなるような感覚に陥る。コモーノーデスと生徒会の面々の間にはそれなりに距離がある。だが、コモーノーデスの目にはシンボリルドルフとエアグルーヴが目だけで人を殺せそうな威圧を放つ巨大な怪物で、自分の目の前にまで迫っているように見えたのだ。
　段々とこれまで忖度と八百長をしていく上で培った猫被りの顔と悪知恵が崩されていく。
「ひ…あ…。」
「どうなのだ？コモーノーデス君。君は、栄えある皐月賞で、真剣に走るウマ娘達がいた中で、あんな下らない侮辱するような忖度をしていたのか？」
　シンボリルドルフが急かすように問う。だが、言い訳の引き出しが無くなったコモーノーデスは耳が垂れ、酸素を求める金魚のように口をパクパクするだけだった。その様子を見たシンボリルドルフは悲しそうに、そして失望したように言葉を出した。
「…沈黙は、肯定と捉えるぞ？」
「あ…あの…会長…。」
「くどいぞ貴様。本当に忖度をしていないなら、皐月賞のあの走りについて説明をしろ。」
　コモーノーデスの言い訳を更に潰すようにエアグルーヴも追及していく。
　そこでコモーノーデスの仮面は粉々に砕け散った。
「…ンド…せ…よ。」
「何？」
「ノイズサウンドのせいよ!!あの施設上がりのウザったい顔をした赤いウマ娘!!アイツのせいでアタシのレース人生ぐっちゃぐちゃなのよ!!だって！アタシのママは中央でデビューして！重賞取ってるウ

マ娘なのよ!?なのにどうして!!アイツばっかり目立って！余裕で勝って！アタシが前座みたいな扱いなのよ!?どう考えてもおかしいわよ!!アタシみたいなエリートよりもあんな雑草ウマ娘が目立つとか絶対何かインチキしてんのよ!!そうよ、絶対そうよ!!あの顔で絶対悪巧みしてんのよ!!会長！ノイズサウンドこそ忖度をしているんですよ!!今すぐに裁きを下しちゃってくださいよ!!」
「……言いたいことは、それだけか？」
　完全に化けの皮が剥がれたコモーノーデスは支離滅裂な主張をして捲し立てていたが、シンボリルドルフは一言で一蹴した。
「それだけぇ!?何がそれだけなんだよ!?アイツなんか…」
「黙れ。」
　更に噛みつこうとしたコモーノーデスにシンボリルドルフは低い声で威圧する。完全に追い詰められたコモーノーデスは大量の汗でぐしょ濡れになり、それまで身体を支えていた足までも崩れ落ちる。
「…君の事は良く分かった。処遇は後日、生徒会で会議をして話し合った上で決めよう。下がって良いぞ。」
「う、あ…何でよ…。何でアタシの事をいじめるの!?うわあああああああああん!!!」
　シンボリルドルフが指示をするとコモーノーデスは自分を視線で殺さんばかりに睨み付けている二人を見て、大泣きしながら生徒会室から出て行った。泣き声が遠退き、静寂が残った生徒会室にいる二人は疲れたように溜め息を吐き出した。
「はぁ…。まさか、あのような邪な考えで入ってくるとはな…。」
「これまで様々なウマ娘達を見てきたが…彼女は、憐れだな。」
　シンボリルドルフはふと、コモーノーデスに関して纏めた資料に目を通す。そこには彼女が地方での成績が書かれていたのだが、トレーナーに関する文献にはこう書かれていた。
『コモーノーデスの前任トレーナーはコモーノーデスが中央に移籍した直後、地方レースにて他のトレーナーに賄賂を渡して勝たせていた事が発覚したため、トレーナー資格を剥奪されている。』
（彼女自身は中央のトレーナーにスカウトされるほどのポテンシャル

はあるのだが…おそらく、ノイズサウンドという存在と出会ってしまった事と、汚職トレーナーの影響で歪んでしまったのだろうな…。）

シンボリルドルフは、自分の力ではどうすることも出来ない問題に肩を落とし、大きな溜め息を一つ吐き出したのだった

問題児、新たな仲間が加わる

「1、2、3、4…ここっ！」

トレセン学園に併設されてあるダンススタジオ。レース後のウィニングライブの為、ノイズサウンドとカイシンは学園指定のジャージを身に纏って鏡と向き合いながら踊っていた。

今、カイシンが踊っているのはそれなりに動きが激しい曲で、ラストサビまで踊っており、最後の〆のポーズを決める瞬間まで来ていた。

「ありゃ？」

だが、すぐに足がもつれてしまい、ビタァン！と顔面から見事に転んでしまう。

「まだ体幹が維持できてないですね。そんな踊りじゃ笑われるだけですよ？」

その隣では綺麗にポーズを決めたノイズサウンド。転んだカイシンを横目で見て、呆れるようにアドバイスをする。

これが恐山チームの日常なのだが、ここに新しい人物が加わった。

「だ、大丈夫ですか？カイシンさん！」

床に寝そべるカイシンに駆け寄り、タオルを差し出す黒いウマ娘。ライスシャワーだ。

「あ、あはは～。ありがとうライスちゃん。」

「ライスさん。コイツは頑丈なのでそこまで心配しなくても良いですよ？」

「ノイズさぁん！それどういう意味ですかぁ！」

「あ、あわわ、喧嘩はダメだよ？」

ノイズサウンドの言葉を拾ったカイシンが噛み付き、ノイズサウンドは軽く流し、それを見て慌てふためくライスシャワー。場は混沌としていた。

ノイズサウンドが強引にライスシャワーを恐山のトレーナールームへと連れて行ったあの日、恐山トレーナーも皐月賞の映像を見返していた。
「ここでトウカイテイオーが抜け出して…ノイズもスパートしてるが、やっぱタイミングが合わなかったのが敗因だな…。」
真剣に最終コーナーから直線までの映像を繰り返し見続け、呟きながら分析をする恐山。そして、敗因を分析し終えたのか一息ついて動画を閉じる。
(やはり、トウカイテイオーは脅威だな…。)
恐山は椅子の背もたれに体重を掛けて、天井を見上げる。日本ダービーはどう攻略するか、思考の海に沈むことにしたのだが、
「やぁやぁ、失礼しますよトレーナーさん!」
「うお!?」
「あ、あの、ノイズサウンドさん?ここは?」
突然、ドアを蹴破る勢いで入ってきたノイズサウンドに驚き、椅子ごとひっくり返ってしまった。
「おや、トレーナーさん。床に寝そべってどうしたのですか?そんな姿勢でいると学園のウマ娘から白い目で見られますよ?」
「…お前が乱暴に入ってきたからだろ。ったく、何の用だ?」
ノイズサウンドの軽口にうんざりと言い返しながら起き上がる恐山。そして、ノイズサウンドの後ろに居る小さなウマ娘に気付いた。
恐山の強面にライスシャワーは臆したのか、ノイズサウンドの後ろに隠れてしまう。
「おい、この娘は?」
「この娘?あぁ、私のクラスメイト、ライスシャワーさんですよ。将来有望かと思いまして連れてきました。」
ノイズサウンドは少し身体をずらしてライスシャワーを恐山の前に出すとライスシャワーは怯えていた。
「あ、あ、あの、ノイズサウンドさん?どうしてライスをここに?」
「どうしてか?私を庇った時のあの気迫、中々良いものでしたからですよ。」

「ちょっと待て。庇った時？一体何があった？」
　その後は、ライスシャワーを迎え入れようとした経緯を聞いた恐山は「やろう、ぶっころしてやる。」と言わんばかりの憤りでコモーノーデスとそのトレーナーに噛みつこうとしたが、どうにかして宥めたり、その恐山に恐怖するライスシャワーを落ち着かせたりとノイズサウンドにとっては重労働の一日となったのだった。
　そして、ライスシャワーは、ノイズサウンドを庇ってくれた礼とノイズサウンドが見込みありと判断したことで恐山のチームに加わることになった。
　新たなチームメンバーが加わったことでカイシンは先輩風を吹かせていたが、ノイズサウンドと同じクラスと知った瞬間、すぐに止めたのはまた別の話だ。

「にしても、ノイズさんって足捌きがスゴいよねぇ～…。」
「うん。タップダンスがお上手なのは知ってたけど、実際に見るとスゴいなぁ…。」
「まぁ、独学ですけどね。」
　ノイズサウンドは軽くステップを踏むと二人から拍手が送られる。
「わぁ…やっぱりスゴいな。ノイズさんに出来ない躍りって無いのかな？」
「う～ん、無いんじゃないかなぁ？」
「クックック。私、こういうことにも手を抜かない主義なのでして。どうでしょう？何かリクエストはありますかな？名作ミュージカルのダンスでも、アドリブでもやりますが？」
「あっ、そうだ！わたし、ノイズさんの躍りで見たこと無いのあったんだ！」
　カイシンが思い出したようにポンと手を叩く。その反応を見たノイズサウンドは何か嫌な予感がした。

　しばらくして、ポップな音楽と共にノイズサウンドが顔を赤く染

め、ぎこちなく歌いながら投げキッスのポーズをする姿があった。
「ノイズさん！すっごい可愛いですよ！」
「ふわぁ…。ノイズさんってこういう躍りも出来るんですね！ライス感動しちゃった！」
（言い出した時点で逃げれば良かった！クソッ！こんな屈辱…！）
ノイズサウンドの嫌な予感は見事的中した。一番踊りたくなかった躍りを踊らされてしまい、その日のダンスレッスンはノイズサウンドの体力だけを奪っていったのだった。

日本ダービーに向けて

日本ダービー。日本のレース史に置いて最も歴史と格式を持つ、クラシック路線に入ったウマ娘達なら誰もが夢見るレースである。
過去にも数多の名勝負がこの府中のターフに刻まれてきた。
最後の直線で何者も追い付けない加速で絶対的な勝利を納めたシンボリルドルフ。
全力を振り絞った逃げで勝ち、世界最高記録の観客からのコールを受けたアイネスフウジン。
その他にもライバルとの死闘、譲れない想いと共に、多くのウマ娘達の垣根をすり抜け、勝者となったウマ娘は特別視される。
いつしか日本ダービーは、最も運が良いウマ娘が勝つレースと呼ばれるようになった。
このレースを目標に死力を尽くすウマ娘やトレーナーがいることから、その特別さがよく分かるだろう。

皐月賞を終え、次に来るG1レース日本ダービー。トレーニング場では出走するウマ娘とトレーナー達がトレーニングを勤しんでおり、その熱気は皐月賞の比ではない。何時の時間でも誰かがトレーニングをしている中、ただ待つように立っているトレーナーがいた。
(コモーは今日も来ない…。皐月賞の後、エアグルーヴ副会長が直々にボクが組んだコモーのトレーニング内容とコモー自体の調子を根掘り葉掘り聞いてきていたが…。どうしたのだろうか?)
釜瀬トレーナーはただ一人、自分の担当ウマ娘を待ち続けていた。
出来ることならば直接会いに行きたいが、ウマ娘専用寮は男女問わずトレーナー立ち入り禁止なのだ。
だから今の釜瀬トレーナーに出来ることはコモーノーデスが来るのを待つだけなのだ。
(もしかして、皐月賞で入着出来なかった事を悔やんでいるのか?それがダービーに出走しないと宣言した理由か?)
それは、皐月賞を終えてしばらく後の事。コモーノーデスから今後

G1には出走しないと連絡が来たのだ。釜瀬トレーナーは原因は皐月賞で良い結果を残せなかったからだと判断したが、全くトレーニングに来ない事から原因は別にあるのではないかと考察をしていた。連絡を入れてみても全く返事が来ず、どうすることも出来ずにいた。
（…待とう。ボクはあの娘の走りに惚れて、あの娘をトレセン学園に連れてきたトレーナーなんだ。僕に出来るのは信じて待つことだけだ。）
釜瀬トレーナーはそれでも待つことにした。例えどんなに時間が経とうが待ち続けよう。そう決断した。
「あ、あの、釜瀬トレーナーさん、ですよね？コモーさんの…」
すると、一人のウマ娘が話し掛けてきた。
「君は…。」
釜瀬はそのウマ娘に見覚えがあった。コモーノーデスとルームメイトのウマ娘だ。
「私、実はあなたにコモーさんの事で伝えたいことがあって…。」
「…伝えたいこと？」
何やら深刻そうな様子に釜瀬は身構える。そして、そのウマ娘からポツリポツリとコモーノーデスの今が語られた。

「皐月賞の後、コモーさんはずっと怖い顔をしていました…。次の日もそんな顔をして出て行ったんです。私は、怖くて声を掛けられませんでした…。しばらくして、コモーさんが帰ってきたんですけど、泣きながらベッドに顔を埋めちゃって…それからベッドにうずくまってしまったままなのです。どうしたのか聞いても、全く返事しなくて…。それからずっと元気がなくて…私、一緒の部屋にいるからとても心配なんです。コモーさんを助けてやりたいんです。」
同室のウマ娘からの情報を聞いた釜瀬は黙って下を向き、そして、顔をあげた。
「分かったよ。伝えてくれてありがとう。後はこのボクがどうにかしてコモーを助けてやろう！何故なら！僕の担当ウマ娘は素晴らしいからね!!」

「ふぃ～…。今日も何とか自制して走れたぁ…。でも、この調子で行けば…。」
　トレーニングを終えたカイシンは、満足げに手応えを実感していた。ゲート試験も合格し、この調子で行けばデビュー戦も問題なく行けるだろう。鼻歌を歌いながらスキップして帰る途中、その足を不意に止めた。
（あれ？テイオー？）
　校門前にテイオーがいたのだが、何やら小さなウマ娘と話している様子だった。そして、丁度話し終えたのか、小さなウマ娘に手を振って戻ろうとしたところでカイシンと目が合った。
「あ、カイシン！今トレーニング終わったの？」
「あ、うん。ところで、さっきの娘って…。」
「うん！ボクのファンなんだ！三冠応援してますって言われちゃった！」
「へぇ～、スゴいなぁ！」
　カイシンは素直に誉めるとトウカイテイオーは照れ臭そうに頬を掻いた。
「えへへ～、…でも何だか不思議な気分だなぁ。ボクはカイチョーに憧れてトレセン学園にやって来たけど…そんなボクの走りを見て、憧れてくれるウマ娘が出てきたんだ。なら絶対三冠取らなくちゃって思うんだ。だって、ボクは無敵のテイオー様だからね！」
「…それは、頑張らなくちゃだね。」
　自信満々に語るトウカイテイオーに、カイシンは複雑な心境になった。
（どうしよう…。わたしとしては、ノイズさんを応援しなくちゃだけど、テイオーさんに憧れている子がいるのを見ちゃったら…。）
　カイシンの立場としては、一緒に練習し、口ではあれこれ言われるが自分の悪癖改善に取り組んでくれたノイズサウンドには感謝しているし、応援したいと思っている。だが、希望と決意と夢に満ち溢れ

た真っ直ぐなトウカイテイオーを見ているとトウカイテイオーも応援したくなる自分がいる。
（わたしは、どうすればいいのかなぁ…？）
心の中で呟いた言葉に答えた者はいなかった。

（最終コーナー…その手前でっ…！）
空が暗くなり始めた時間。トレーニング場で赤いウマ娘が走り続けていた。
東京レース場を想定して最終コーナー手前でスパートを掛けて加速していく。
「はあああああっ!!」
雄叫びをあげて最後の直線を駆け抜けるノイズサウンド。そして、ゴール役の恐山が手に持ったストップウォッチを押す。
「…タイムは悪くないな。歴代のダービーウマ娘に迫るタイムだぞ。」
「…ですが、足りない。これではトウカイテイオーには勝てないかもしれない…。トレーナーさん、もう一回走ってきます。」
恐山から誉められはしたが、ノイズサウンド的には納得は行かなかったようで、もう一度スタート位置へと戻ろうとする。
「待て。もう門限も近い。さっさと寮に帰らないとフジキセキが怖いぞ。」
しかし、恐山はもう一度走ろうとするノイズサウンドを止めた。止められたノイズサウンド既に暗くなっている空を一瞥して、忌々しげに舌打ちをした。
「チッ…。いいでしょう、今日はこれで終わりにしますよ。あぁ、時間の早さが憎い…。」
ノイズサウンドは渋々と言った様子でトレーニング場を後にした。
「日本ダービーは…必ず…。」
寮に向かう間もノイズサウンドは次のレースのコース取りや意気込みをブツブツと呟いていた。その後ろ姿を見た恐山は懸念してい

た。
（アイツ…トウカイテイオーに絶対勝つと宣言した以上、有言実行しなければと根を詰めているな…。もし、日本ダービーでノイズサウンドが負ければ…）
そこまで考えた恐山は振り払うように頭を振った。
（止めよう。出走する前から杞憂するのはトレーナーとしては良くないな。今はノイズサウンドを仕上げるのが先だ。）
日本ダービーまでの時間は、迫ってきていた。

小物、覚醒する。

（もう…もう終わりだ…。アタシは、もう、走れない…。）

コモーノーデスは絶望のどん底にいた。自分の忖度が生徒会長に見破られ、あろうことか、その生徒会長に逆ギレして噛み付いてしまった。

（こんな事になるなら…アタシは…ママの娘なんかにならなきゃ良かった…。）

毛布にくるまりながら自己嫌悪をするコモーノーデス。シンボリルドルフから呼び出しを食らってから、ずっと落ち込み続けている。もうこのままトレセン学園を出ていこうか、そう考えた。

「おーい！いるんだろコモーノーデス！このヒシアマ姐さんがあんたに伝言を預かってきたよ！」

すると、部屋の外から竹を割ったような声が聞こえてくる。寮長のヒシアマゾンが呼び掛けてきたのだ。だが、コモーノーデスはそれに対応できる精神状態ではなく、毛布を引っ張って完全にくるまってしまった。

「いるのは分かってんだよ！出てこないならこっちから行ってやるからな！」

しかし、ヒシアマゾンはお構いなしにドアを開けて入ってきた。

「何だい、何だい。そんなにしょぼくれて、あんたのルームメイトも心配してんだよ？ほら、出てきな！」

ヒシアマゾンはそう言うとコモーノーデスを包んでいる毛布を強引にひっぺがした。外気に晒されたコモーノーデスは首をゆっくりとヒシアマゾンの方へ向ける。

「あーあー、髪もボサボサだし、その目のクマ、よく眠れてないんじゃないのかい？つか、ご飯もちゃんと食ってんのかい？」

「…ヒシアマゾンさん、伝言って誰からです？」

「あぁ、あんたの担当トレーナーからだよ。とにかく話がしたいからトレーナールームに来いってさ。」

「…誰とも話したくないので、帰ってくれませんか？」

「いーや、そうは行かないね！こんな状態のあんたを放ったら寮長の名がすたるってもんさ！ほら、さっさと着替える！」
姉御肌気質であるヒシアマゾンに押し切られたコモーノーデスはそのまま着替えさせられ、髪も整えられ、部屋から追い出されるように出て行かされた。他に行く宛も無いコモーノーデスは仕方なく釜瀬のトレーナールームへと向かった。
（一体何を話すってのよ…。もうダービーには出ないって言ったのに…。）
渋々と、俯きながら重く感じる足を一歩一歩、ふらふらと進めるコモーノーデス。その姿はまるで処刑台へ連れていかれる罪人のようにも幽霊のようにも見える。
（だってもう、アタシの実力じゃ…どうにもならないのに…。）
地面と向き合いながら釜瀬のトレーナールームへ辿り着いたコモーノーデスは、億劫になりながらもゆっくりとドアノブに手を掛け、その手を捻った。
「待ってたよ。コモー。」
そこには予想通り、釜瀬が椅子に座っていた。コモーノーデスは開けたドアをゆっくりと閉めて、その場に立ち尽くす。
「こちらに来なよ。君の好きなコーヒーを淹れてやるからさ。」
釜瀬が応接用のソファーに指をさすと、コモーノーデスはとぼとぼとソファーへ歩き、腰掛けた。
「君の事を、ルームメイトから聞いたよ。とても悲しんでいるって心配してたよ。」
釜瀬はコーヒーを淹れながらコモーノーデスに優しく、それでいていつも通りに話し掛ける。だが、コモーノーデスに反応はない。
「皐月賞の後で何があったんだい？あぁ、嫌なら言わなくても良いぞ。」
この男はどこまで能天気なのか。コモーノーデスは呆れを含んだ目で釜瀬の背中を見る。それでも、釜瀬はペラペラと喋り続ける。
「君の走りは実に素晴らしい。あの時、地方で見た君の最初から誰も先頭を譲らない力強い走り…。今、思い出しても惚れ惚れするよ。だ

から、最も速いウマ娘が勝つと言われている皐月賞で勝たせたかったのだが…。ボクの実力不足だったみたいだね。」
　うっとりするように話していたかと思えば、少し申し訳無さが籠った喋り方になった。まるで、非があるのは自分の方だと。
「…何でそうなるんですか？」
「そりゃそうなるさ！ボクは名門の出であり、エリートでもある。実質、君という素晴らしいウマ娘を中央に連れてきたのはボクだからね。慣れない環境に連れてきてしまったのかと、ボクが責任を感じるのは当然だとも。」
　コモーノーデスには目の前にいるトレーナーの言うことが理解できなかった。トレーナーの言うことを聞かず、期待を裏切ったのは自分だと言うのに。このままでは自責の念に囚われてしまう。そう察したコモーノーデスは打ち明けることにした。
「…あなたのせいじゃ、ないですよ。」
「では、誰のせいなのだい？ノイズサウンドかい？トウカイテイオーかい？」
　走っていたウマ娘は誰も悪くないだろうと思って問い掛けてくる釜瀬に、コモーノーデスは無意識に噛んでいた唇を離した。
「…アタシのせいよ。」
「…何故だい？」
「アタシが…中央に相応しくない薄汚いウマ娘だからよ！」
　コモーノーデスは本心をトレーナーにさらけ出した。その言葉を聞いた釜瀬は真剣な目でコモーノーデスを見守っている。
「あんたも知ってるでしょ!?アタシのママは、重賞勝ちを経験しているウマ娘で！アタシもそれを誇らしく思っていた！走るのも、レースも楽しかった！なのに！あのノイズサウンドと出会ってから全部が変わっちゃった…。」
　次から次へと吐き出し続ける本心。もう取り繕えない。自棄になったその口は更に溜まったものを吐き出し続ける。
「アタシは重賞勝ちのママの子として、何としても勝ちたかった！地方で走っている時に付いていたトレーナーの汚いやり方には気付い

ていたけど、見ないふりでいた…なりふり構ってられなかった！勝てれば良いって、結果が良ければそれで良いって思ってた！その結果が、この間の皐月賞よ…。みんな真剣に走っているのに、アタシだけ不真面目に走って、あなたの期待も裏切って…みんなを、侮辱した…。」

わめき続けたその声は嗚咽に変わる。

「ねぇ、失望したでしょ？ガッカリしたでしょ？あんたが地方で見出だしたウマ娘は、地方の薄汚いやり方が染み付いた卑怯者なのよ!!こんな奴が中央で走っても、みんないい顔しないでしょ!?」

そこまで聞いた釜瀬はようやく口を開いた。

「…そうか。それが、今までの君なのか。」

コモーノーデスが言った言葉を噛み締めるように呟く釜瀬。もうここには居られないだろう。コモーノーデスは別れの言葉を言おうとした。

「もうアタシはトレセン学園を出ていきます。他にまともな道を探して…」

「なら、ここでの君の走りを見せてほしい。」

だが、釜瀬は引き留めた。予想外の回答にコモーノーデスは首をかしげるしかない。

「…は？」

「今までの君がその薄汚い走りだと言っているなら、中央での君の走りはどれだけ惚れ惚れする走りなのか見てみたい。忖度など無い、本気の君の走りをボクに見せてほしいのだよ！」

「な、何を言ってるのよ!?言ったでしょ？アタシは地方でやらせをしていたって…」

「ここは地方ではない！中央だ！」

コモーノーデスは説得しようとしたが、釜瀬が声を張り上げた事でその口を閉ざしてしまう。

「過去は過去なのだよ！ボクは地方で卑怯なやり方をしていたトレーナーかい？違うだろう？ボクは君という個性を輝かせるためにいるトレーナーさ！ボクは君を輝かせるために一生懸命トレーニングメ

ニューを組んだし、それに君も応えてくれた！あの時トレーニングをしている君は紛れもないレースを、ターフを駆ける事を愛するウマ娘だったよ！薄汚いウマ娘だと？そんな汚れ、ボクが拭い取ってやるし、そう言わせるまで気付かなかった自分が一番腹立たしい！」
「ど、どうしてそこまで…。」
「ふんっ、何度も言わせないでくれたまえよ。ボクは君のトレーナーさ！担当ウマ娘のために身を粉にして動くのは当然さ！」
　コモーノーデスはこれまで、釜瀬は都合の良い存在だと思っていた。だから、自分の事を知れば失望するだろうと思い込んでいた。
　だが、今、目の前にいるトレーナーは、いつもと変わらない様子なのに、その姿が眩しく見えるのだ。
「…何なのよ。」
　ポツリと震えた声で言葉を溢す。
「本当にバカなトレーナーじゃん…。」
　ポロポロと目に溜まった涙が溢れるコモーノーデス。しかし、その顔は憑き物が落ちたような笑顔だった。
「む、ボクはまた変なことを言ってしまったか？」
　その顔を見た釜瀬は難しい顔をする。その様子が可笑しくてコモーノーデスは首を横に振った。
「そうじゃないわよ。なんか楽になったのよ。」
「そうか！よろしい、ならば次の日本ダービーに…」
「出ないわよ。」
　釜瀬の意気込みに水を差すようにコモーノーデスはキッパリと答えた。釜瀬は急ブレーキを掛けられてしまい、ずっこける。
「な、何故だい？」
「だって、アタシは皐月賞で忖度をしたし、あろうことか、その事を指摘したシンボリルドルフ生徒会長に逆ギレしたウマ娘よ？そんな奴がダービーに出れると思う？例え会長や協会が許しても、世間が許さないわ。」
「うむむ…。そうなると今のＧ１に出るのは悪手だな…。」
　コモーノーデスのダービーを出ない理由を聞いた釜瀬は渋々と

言った様子だが、受け入れたようだ。
「よし！ならば、これからのレース計画を立てよう！まずは日本ダービーを回避してＧ２、Ｇ３で地道に走って行く。これで良いかい？」
「ええ、異論はないわ！それと、もう一つ頼みたい事があるんだけど…。」

次の日、ライスシャワーと共に登校したノイズサウンドは席に腰掛けてライスシャワーとレースに関する会話をしていた。
そこへ、一人のウマ娘が入った瞬間、場の空気が静まった。
（うん？何があったのでしょうか？）
不思議に思ったノイズサウンドが辺りを見渡すと、教室の出入口に立っているウマ娘を見て納得した。
出入口で腕を組んで仁王立ちをしているコモーノーデスがいたのだ。
「あれって、コモーちゃん？」
「皐月賞以来だけど…雰囲気変わった？」
（…おやおや。ここ最近は不登校気味だった彼女が登校するとは…。）
クラスメイトはいつもと違うコモーノーデスに動揺を隠せず、ノイズサウンドは珍しいこともあるものだと思いながら見ていると、コモーノーデスがこちらに向かってきた。
「!!」
ライスシャワーが身構えるが、ノイズサウンドはそれを手で制する。目の前に立ったコモーノーデスにノイズサウンドは用件を聞いてみることにした。
「…何か御用ですか？コモーノーデスさん。」
「ノイズサウンド。あんた、アタシと模擬レースしなさい。」
コモーノーデスの宣戦布告にクラス中にどよめきが大きくなった。
「アタシはダービーには出ない。だから、今日あんたと決着を着けた

いの。」
「…クックック。ええ、良いでしょうとも。丁度今レースをする相手が欲しかった所でしたので。」
決意に満ちたコモーノーデスの眼を見たノイズサウンドは面白げに笑いながら受け入れたのだった。

そしてトレーニング時間。
コモーノーデスの大胆な宣戦布告を聞き付けた野次ウマ娘達が集まって来ていた。
その中には、コモーノーデスに威圧したシンボリルドルフの姿もあった。
（コモーノーデス君…。あの後どうなったかは預かり知らぬが、君の走り、君の矜持をこの目で見てやろう。）
そして、コモーノーデスとノイズサウンドはゲート前で準備運動をしていた。
（これで今までの汚らわしいアタシとお別れ…！バイバイ、過去のアタシ。そして、初めまして、これからのアタシ…！）
（どういう風の吹き回しか知りませんが…丁度良い。日本ダービーに向けた調整がどうなったかの証明に相応しいですね。）
身体をほぐし終えた二人はそのままゲートに入る。
そして、ゲートが開かれた。

最初のレース展開で全員がどよめいた。何故ならば、コモーノーデスがペースを度外視した大逃げをしたからだ。
「あああああああああああああああっ!!!!!!」
雄叫びを上げながら全力疾走するコモーノーデス。ノイズサウンドは呆れ半分でその後ろ姿を追い掛けていた。
（いつもの調子でやったら絶対忖度をしてしまう！それならば！もう

何も考えないで頭空っぽにしてぶっちぎってやる！ペース？展開？知ったこっちゃないわよ!!）

コモーノーデスは更に突き放そうと走り続ける。だが、それでもノイズサウンドはジリジリと距離を詰めていく。例え大逃げでレースの展開が速くなろうが臨機応変する頭のキレがあるからだ。

（もう足音が!?まだ、まだ先頭でいたい！せめて、最終コーナーまで…！）

コモーノーデスはスタミナが尽き始め、段々とそのスピードを落としていく。

そして、第3コーナーでまだ余裕のノイズサウンドにあっさり抜かされてしまった。

その後は、ノイズサウンドの一人旅。ただ悠々と駆け、小さくなっていく後ろ姿を見たコモーノーデスはよれながらも走り続ける。

（相変わらず、何なのよ、あんたの、その脚…。）

結果、ノイズサウンドの圧倒的大差勝ち。コモーノーデスがゴール板に辿り着いた時には、もうノイズサウンドの姿はなかった。既に日本ダービーとトウカイテイオーにしか興味がないのだろう。

コモーノーデスは満身創痍だった。

「あ、はひ…。ひぃ…。」

スタミナが尽きてターフに沈むコモーノーデス。そこに釜瀬が駆け付けた。

「と、とれー、なぁ。ど、だった？」

「素晴らしい！素晴らしかったよ！これからの君はこういう走りなのだな！よし、そうと決まれば早速トレーニングメニューの構築だ！」

釜瀬は興奮のまま叫ぶとコモーノーデスを放って行ってしまった。

「ちょー、あた、しい、置いてく、なぁ…。」

呼び止めようと思ったが、無理に身体を動かしてもキツいだけかもしれない。コモーノーデスはそのまま空を見上げた。

（結局、ボロ敗けだけど、なんかスッキリした。）

久し振りに思い切り走った結果、言い表せない満足感が出てきて、この感覚に浸って酔いしれようとコモーノーデスは目を閉じた。

「なぁ！さっきの走りスゴかったぞ!!」
と思ったら、急に大声で呼び掛けられた。驚きながら目を開けると、空一色の視界にウマ娘の顔が覗き込んでいたのだ。
そのウマ娘は青髪のツインテールで渦巻のような瞳をした赤と青のオッドアイが特徴的なウマ娘だ。コモーノーデスを見つめる目は輝いており、少し呼吸が整ったコモーノーデスは誰なのか尋ねてみた。
「あー…あの、どちらさん、で？」
「ターボか？ターボはツインターボって言うんだ！よろしくな！」
「え、ええ…よろしく？」

先程のトレーナーと、同じような興奮気味に語り掛けるツインターボに戸惑うコモーノーデス。その様子を遠くで見ていたシンボリルドルフは安堵していた。
（コモー君…。どうやら君は振り切ったようだな。あの走りで本当の君を見届けたぞ。）
今年はＧ１を走ることは出来なくなったが、来年のＧ１ならばファンも迎え入れてくれるだろう。シンボリルドルフは肩の荷が下りた気分になり、また生徒会の業務へと戻っていくのだった。

雑音、日本ダービー出走

遂に迎えた日本ダービー当日。
東京レース場では大勢の観客達が詰め寄ってきていた。それは日本ダービーでは当たり前の事なのだが、今年の盛り上がりは段違いだ。その理由は、トウカイテイオーとノイズサウンドだろう。
皐月賞で驚異的な末脚を見せたノイズサウンドは二番人気まで押し上がっていたのだ。
「……。」
そんな二番人気のノイズサウンドは控え室で椅子に座り、精神統一をしていた。
微動だにしていない姿はまるで蝋人形にでもなってしまったのではないかと思わせるほどだ。
「の、ノイズさん…すごい集中してる…。」
今までにない姿を見せるノイズサウンドにライスシャワーは息を飲み、恐山は口には出さないが、額に伝う冷や汗がノイズサウンドの威圧を物語っていた。
「…そろそろパドックの時間ですね。行ってきます。」
「…おう。」
「が、頑張ってね！ノイズさん！」
「…ところで、カイシンは？」
「あぁ、一足先にスタンドのスペースを確保してもらってる。」
「そうですか。」
ノイズサウンドはそれだけ言葉を交わすとパドックへと向かっていったのだった。

パドック前の観客席では、レースを観戦しにきた観客達がパドック入場までの間、会話をしたりレース情報を眺めていたりと暇潰しをしていた。
「日本ダービーは誰が勝つんだろなぁ～！」

「やっぱ、テイオーっしょ！あのルドルフに次ぐ三冠ウマ娘になるかもしれんって言われてるんだぜ!?」
「う～ん…テイオーを応援したいけど、俺はノイズサウンドかなぁ…。アイツの皐月賞見たかよ？今度こそ差し切ってやるって覚悟決めた目で走ってんだぜ？ありゃ絶対テイオーを徹底マークしてるって。」
「にしても、コモーノーデスは出走せずかぁ…。」
「仕方ないだろ。今は出走停止処分食らってんだからさ。」
「でもなぁ、見たかったよなぁ。アイツ、過去がアレだけど、実力はあったし、ファンもいたからな。」
「俺の友人もコモーノーデスのファンだったけどさ、出走停止処分って聞いて、ダービーで走る姿が見たかったって、めっちゃへこんでたよ。」
「それは…可哀想に…。」
「まぁ、永久に走れないって訳じゃないからさ。今後に期待だな。」
観客達は口々に話しながらパドックを見守る。
『十二番、二番人気、ノイズサウンド。』
そして、ノイズサウンドがパドックに現れ、観客達もノイズサウンドの名が耳に入ってきたと同時に一瞬、会話を止めた。
いつものようにコツコツと足音を響かせ、優雅に、そして、赤黒い燕尾服のような禍々しい勝負服に見合うような含み笑いとポーズを取るノイズサウンド。
「な、なぁ、前よりも邪悪さに磨きがかかってね？」
「やっぱ、すげぇ迫力だぜ…。」
「テイオーは勝てるのかなぁ…。」
他の出走者とは比べ物にならないほどのプレッシャーを感じるノイズサウンドに会場はどよめき始め、先にパドックに出ていた他の出走ウマ娘も冷や汗をかいて息を飲む。
（だ…大丈夫！テイオーさんなら、あんな怖くて悪そうなウマ娘にだって、勝てるんだから！）
観客と同じくパドックを見守っている小さなウマ娘、トウカイテイオーに憧れを抱いているキタサンブラックはノイズサウンドのプ

レッシャーを感じつつもトウカイテイオーの勝利を信じ、自然と柵を掴む手に力が入る。
『二十番、一番人気、トウカイテイオー。』
すると、遂に一番人気のトウカイテイオーが姿を見せた。
トウカイテイオーは自慢のステップを軽やかに踏みながらパドックで存在感を見せつける。
「うおおおおおっ！」
トウカイテイオーへの声援を込めた歓声は東京レース場を震わせ、ノイズサウンドが勝つのではないかという杞憂を吹き飛ばす程だ。その姿は正しく帝王の名に相応しいだろう。
だが、ノイズサウンドはそのテイオーの姿を邪悪な笑みでマークしていた。歓声など耳に入れずにただ一人、トウカイテイオーの無敗三冠を阻止する為に心を燃やしていた。
（今度こそ…今度こそ差しきってやりますよ。トウカイテイオー…！）

一足先にスタンドに来た恐山チーム。ライスシャワーは後ろに広がる観客たちに圧倒されていた。
「ふわぁ…お客さんがいっぱい…。」
「そりゃあ、この日本のウマ娘達の夢でもあるからな。だが、今年は例年よりも多いかもな。」
「…やっぱり、トウカイテイオーさん…ですよね？」
ライスシャワーの問いに恐山は頷く。
「無敗三冠の夢を誓ってここまで無敗。しかも、ノイズサウンドという夢を阻む物語としてはこの上ない悪役が現れたんだ。エンターテイメントとしてこれ程極上のものはないだろ。」
「でも…それじゃノイズさんが勝っても…。」
「心配するな、ライス。アイツはそうなる事を分かっててやっている。例え悪評を浴びようが涼しい顔して受け流すかもしれんが、それでも限界が来るかもしれん。その時は俺らで支えてやれば良い。」

そうだろう?と、恐山がカイシンに話を振るが、カイシンはボーッとターフを見つめていた。
「…?おい、カイシン?」
「あぁ?んだよ…あっ、あぁ、何ですか?トレーナーさん!」
「…圧倒されるのも分かるが、もう少し周りに気を配れ。もう一つの人格が出てたぞ。」
「あ、あはは、少し掛かっちゃったみたいですねぇ。」
照れ臭そうにカイシンは笑ったが、カイシンはダービー前に見た、トウカイテイオーの輝かしい姿に、どちらを応援すべきか未だに迷っていた。
(うぅ〜、どうすれば…どうすればぁ〜…。)
会場の雰囲気に圧されてもう一つの人格も出掛かっている状態になりながらもカイシンはゲートを見守るしかなかった。

「トウカイテイオー。」
ゲート前、各々のウマ娘がウォーミングアップする中、トウカイテイオーも脚を解すように準備運動をしていると、声を掛けてくるウマ娘がいた。
「ノイズサウンド…。何だい?」
「皐月賞では負けてしまいましたが、次こそ、次こそは差しきって見せましょう。貴女の無敗伝説もここで終わる。ゴールした時、貴女が見るのは私の背中ですよ。」
異様な雰囲気を放つノイズサウンド。今すぐにでも倒してやると言う圧に、トウカイテイオーは息を飲むが、すぐに笑って見せた。
「いいよ!でも、ボクが勝つのは変わりないけどね!」
その様子を見たノイズサウンドも邪悪な笑みを浮かべ、その自信満々の顔を崩してやろうと意気込むのだった。

『今年も、快晴、良バ場で迎えました、日本ダービー。皐月賞に続き、大外二十番、単枠に指定されました、トウカイテイオー。憧れの皇帝

シンボリルドルフに続いて、無敗でダービーを制する事が出来るのでしょうか？そして、二番人気のノイズサウンド、皐月賞は惜敗の二着となりましたが、日本ダービーで汚名返上出来るのでしょうか？』

実況のアナウンスが聞こえるなか、ノイズサウンドはトウカイテイオーに宣戦布告をした後、自分が収まるゲートを睨み続けていた。

（次こそ…次こそは…。この時の為にレース展開をできる限りの予想した。どこでスパートを掛ければ速くなるか検証もした。最後の直線を加速できるか練習もした。この日本ダービーに向けた仕上がりは上々と言った所…。）

ただ一人、ゲートを睨むように立ち尽くすノイズサウンドは遠目から見ても不気味な雰囲気だ。

そして、出走のファンファーレが鳴り響き、各々がゲートに収まっていく。

（私は、この大観衆の前で勝たなくてはならない！トウカイテイオーに勝ち、無敗三冠の夢を阻んだウマ娘になる!!）

ノイズサウンドはゲートで体勢を整え、

ガコン！

ゲートが開かれた。

『スタートしました！数人がやや出遅れましたが横一直線のスタートです！トウカイテイオーとノイズサウンドも良いスタートを切りました！』

（よし！スタートは理想の状態だ。後は…。）

ノイズサウンドはトウカイテイオーを鋭い視線で徹底的にマークして後方に着けるように走り続ける。

（ノイズサウンドのプレッシャーが後ろから感じる…。うかうかしていたらあっさり追い抜かれそうな、スゴい気迫だ…！）

トウカイテイオーも、先行策を取っているがやや後方に位置してい

る。それ故、ノイズサウンドの徹底的なマークの気配を感じ取っており、走りながらも気合いを入れ直す。
（でも、ボクはカイチョーみたいになるのが夢なんだ！負けられない！）

「ノイズさん！頑張って！」
ライスシャワーは小さな身体に精一杯空気を吸い込んでノイズサウンドを応援する。目を詰むって声を出すその姿から一生懸命な様子が見て取れる。
（…そろそろ、ノイズの仕掛け所だな。）
恐山はレース展開からノイズサウンドと一緒に建てた作戦の開始地点が近付くつれ、組んでいる腕の力も入ってくる。
（どっちを…応援すれば…）
だが、カイシンだけはどっちを応援すべきかまだ迷っていた。共に切磋琢磨した仲間か、夢に向かって一直線に走る親友か。未だに決めきれずにいた。
（～～～～～っ！あぁ～～～～っ！俺を抑えまくってた奴が何しょげてやがる！おい、変わりやがれ！ありったけの声援ぶちかましてやる!!）
「おい、ニヤニヤ野郎!!一着じゃなかったら承知しねぇぞこの野郎がよぉ!!!」
それ故、皐月賞の時よりも早く、もう一つの人格が出てきてしまった。

（そろそろ…よし、ここでっ！）
ノイズサウンドは一呼吸を入れると、スパートを掛け始めた。
『第3コーナー手前、坂を登って下りに入りました。あっと!?ここでノイズサウンドの動きが激しくなった！ロングスパートで勝負に出るのか!?じわりじわりと先頭との差を詰めてくる！赤い悪魔が迫ってきているぞ！』

実況がノイズサウンドの異変に気付き、段々と実況に熱が籠ってくる。

『大ケヤキを越え、第４コーナー！トウカイテイオーも仕掛け始めた！最後の直線入った！』

最後の直線に入り、実況も観客たちもボルテージが上がっていく。

だが、恐山は目を細めた。

（…ノイズ？）

恐山はノイズサウンドの様子を見て違和感を感じたのだ。

最終直線に入ったノイズサウンドはスパートし続けているが、それでもトウカイテイオーを差し切れずにいた。あのタイミングでスパートを掛けたのに、トウカイテイオーは大外からのスタートだったのに。それがノイズサウンドの心に焦りを産み出していた。

（バカな!?本来ならここで先頭に立っているはずなのに…!?）

「トウカイィ…ッテイオォォォォォーーーーーーーーーーーーー!!!!!!」

ノイズサウンドの顔にいつもの人を見下すような笑みが消える。

凄まじい形相でトウカイテイオーを追い抜こうとするその姿に他のウマ娘達は気圧されてしまう。

『トウカイテイオー抜け出した！ノイズサウンドもバ群を掻き分け懸命に追い上げてくる！他のウマ娘を差し置き、完全に二人の戦いだ！テイオーか!?ノイズサウンドか!?』

「ぬぁぁあああああああ！」

「はぁあああああああああ！」

ノイズサウンドはトウカイテイオーも横に着けるようにスパート掛け続ける。

（走れ走れ走れ！私の脚は何のためにある!?ここで追い抜かなければ、一着にならなければ、後がなくなる！だから走れ！もっと動け!!私の脚!!追い抜け!!）

ノイズサウンドは自分に叱責してスパートへの活力する。無敗三冠阻止。それがノイズサウンドが自分に課した使命だからだ。

しかし、ノイズサウンドが見たのは、ほんの少し、だが、確実に離れていくトウカイテイオーの背中だった。
『トウカイテイオー突き放す！トウカイテイオー一着！トウカイテイオーの勝利!!無敗三冠に後一歩まで近付きました!!』
トウカイテイオーの無敗二冠達成。その偉業達成の瞬間に、東京レース場は歓声に飲み込まれた。
「テ・イ・オー！テ・イ・オー！テ・イ・オー！テ・イ・オー！テ・イ・オー！」
観客達はコールを響き渡らせる。走りきったトウカイテイオーも、汗だくながら笑顔でそれに応え、指二本を空に掲げた。それを見た観客達は更に歓声を張り上げたのだった。
「あ…ノイズさん、負けちゃいました…悔しそう…。」
「…アイツの強さは、認めるしかないな…。」
しかし、ノイズサウンドの勝利を応援していた恐山チームはテイオーの勝利を讃えはすれど、喜べなかった。何故なら、またもや二着になったノイズサウンドがターフに膝を着き、悔しさから地面に向かって拳を叩き付けていたからだ。
（ノ、ノイズさん…。わたしが応援してたら…。）
二着になった瞬間に戻されたカイシンは負けたノイズサウンドの姿にどちらを応援すべきか迷っていた自分に罪悪感を感じた。どんな顔してノイズサウンドと向き合えば良いのか、分からなくなったのだ。
（負けた…そんな…トウカイテイオーの皐月賞からダービーまでのトレーニングを考慮してどのようなペースで行くか、どのようなコース取りで行くか、全て完璧だったのに…。）
ノイズサウンドはこの日の為の調整を入念に行ってきた。それこそ、インタビューも全て拒否をして、寮の門限スレスレまでトレーニングをして、突発的なコモーノーデスとの模擬レースでハイペースのレース展開のコツも掴んできた。
しかし、トウカイテイオーはノイズサウンドを突き放した。ほんの僅かに前に出たトウカイテイオー。だが、それはトウカイテイオーに

勝つと宣言したノイズサウンドに確かな敗北を突き付けたのだ。
「これでは…道化だ…。」
ノイズサウンドの弱音は今もレース場に響き渡る勝者を称える歓声にかき消されたのだった。

雑音、焦燥する。

『さぁ、最後の直線に入った！トウカイテイオーが抜け出した！ノイズサウンドも追い上げてくるがテイオー突き放す！夢を叶えるかトウカイテイオー!!三冠ウマ娘だ!!皇帝に憧れてターフに立ったウマ娘が今、同じ舞台に立ちました！三冠の帝王の誕生だ!!!』

（敗けた…。完全に…。）

『三冠阻むって言っておきながら、結局負けたのかよ、なっさけねぇ。』

（…!?）

『ホント、大口叩いて負けるとかカッコ悪すぎでしょ。』

（あ…あ…。）

『そんな負けた奴よりもテイオーだよ、テイオー！三冠だって！スゴいよね～。』

『テイオー！テイオー！テイオー！』

（私、は…）

「っはぁ!!?」

飛び跳ねるように起き上がるノイズサウンド。寝間着は大量の汗でぐっしょり濡れており、肌に張り付いて気持ち悪さを感じる。時計を見ると、針は午前４時を指していた。

（次の菊花賞…私は…勝てるのか？）

まだ日が上っていない一人しか居ない寮の部屋でノイズサウンドは頭を抱えたのだった。

（次の菊花賞…距離は３０００ｍ…。）

まだ外が暗いグラウンドでノイズサウンドは一人、菊花賞を想定した自主トレーニングを行っていた。

イメージで作り上げた出走者達を相手に走るノイズサウンド。そして、最後の直線へ入った瞬間にスパートを掛けた。

（走れ…走れ…！もっと走れ！）

ノイズサウンドはイメージ上の相手を次々と追い抜いていく。し

かし、その顔に余裕はなかった。
（まだだっ！まだこの程度の加速では、今後成長するアイツに追い抜けない!!）
イメージ上の前を走る相手に追い抜こうと歯を食い縛って加速を続けるノイズサウンド。
だが、それでも前を走るイメージは駆け抜け、小さくなっていく。
「はっ、はっ、はぁっ…。」
ゴール板を通り抜けたノイズサウンドは満身創痍になり、全身で息をする。
思い切り走った反動で胃の中のものが込み上がりそうになるのを、息を整えてこらえる。
「勝てるイメージが…浮かばない…。」
そして、途方に暮れるように空を見上げて呟いたが、そのまま静寂に吸い込まれるだけだった。

「…今日の練習はここまでにするぞ。」
その日の放課後、恐山はトレーニングをし始めて一時間ほどで練習の終了を告げた。
「は？」
「ふぇ？」
「…へ？」
普通ならば、二、三時間もトレーニングメニューを組んでいる恐山が一時間で練習を切り上げた事で担当のウマ娘達はそれぞれ困惑の声をあげた。
「ちょっと待ってください。トレーナーさん？一体どういう考えですか？」
代表してノイズサウンドが語気を強めながら理由を問い詰めた。
しかし、恐山はそれでも表情を変えず、理由を話す。
「ライスシャワー以外のお前らがおかしいからだ。」

「…私達に、分かるように、言ってくださいますか？」
恐山の大雑把すぎる理由にノイズサウンドは苛つき始める。その圧は日本ダービーの最後の直線で見せた圧と同等のものだ。しかし、それでも、恐山は臆さずに口を開いた。
「じゃあ、具体的に言うぞ。まずはカイシン。お前の走りはどこか上の空だぞ。何があったか分からんが、そんな状態で練習されても何も身に付かないぞ。さっさと吹っ切れろ。そしてノイズ、お前はいつものコンディションじゃないな。ダービー以降、無茶な自主練でもしているのか？だったら止めておけ。」
担当の事をよく見ている発言でカイシンは気まずそうに俯いた。しかし、もう一人は黙っていなかった。
「無茶な自主練？何を言っているのですか？私がそんなに疲れきっているように見えるのですか？私はいつも通りですよ？貴方の目はサングラス越しだから曇って見えてるのですかね？早く練習を再開させてほしいので次のメニュー教えてください。」
「駄目だな。俺はお前らのトレーナーだ。お前らが絶好調で走る姿を腐るほど見てきたし、いつものお前らの様子もよく見てきた。そんな俺から見たお前ら二人の様子が、いつもと違うから今日の練習を切り上げた。文句を言われる筋合いはないな。」
「ほう？そうですか、そうですか！それはつまり、私に菊花賞を負けろと言っているという認識でよろしいですかな？！」
「おい、ノイズ。お前は何をそんなに焦ってるんだ？トウカイテイオーに二連敗したのが堪えたのか？」
ノイズサウンドが食い下がり、恐山が反論し、ノイズサウンドが更に噛みつき、恐山が図星を突く。
「あ、あわわ…ど、どうしよう、カイシンさん…！」
「え、えーと、えーと…。」
このままでは言い争いがヒートアップして関係が拗れてしまう。そう察した外野の二人はどう穏便に収めようか、右往左往する。
「大変よ！誰か来て!!」
その二人を止めたのは助けを呼ぶ第三者のウマ娘だった。体操着

を着ていることからトレーニング中の事故だろう。
「どうした？」
恐山はノイズサウンドとの言い争いを切り上げて、事情を聞くことにする。しかし、ノイズサウンドはどこか不機嫌な様子だ。
「テイオーちゃんが…！足を押さえて痛がっているの！」
しかし、助けを呼んだウマ娘が事情を説明し終える前に、ノイズサウンドは凄まじいスピードで現場へと向かっていったのだった。

保健室へと運ばれたテイオーは診断の結果、ダービー直後に足の骨にヒビが入り、その状態のまま練習した結果だと言われた。菊花賞の出走は難しいとも言われ、テイオーとそのトレーナーはショックを受け、付き添ったノイズサウンドは完全に顔から表情が抜け落ちてしまった。
「……。」
「…テイオーはどうだった？」
ノイズサウンドは何も言わずに保健室から出ていった。外には恐山とそのチームメンバーがおり、恐山が尋ねた。
「…菊花賞の出走は難しいと診断されました…。」
「そ、そんな…！」
「テイオーさん…大丈夫かな…。」
ノイズサウンドからの報告に恐山は眉間にシワを寄せ、カイシンとライスシャワーはテイオーの身を案じた。
「…今日のトレーニングはもう終わりにしましょうか。先程は我が儘を言って申し訳ありませんでした…。」
ノイズサウンドはさっきまでの覇気が嘘のように無くなり、すんなりと恐山の言うことを聞いた。
「…おう。」
恐山はそう返したが、とぼとぼと歩くノイズサウンドの後ろ姿が前よりも小さく見えたのだった。